わたしの聖書が一番！４巻

上り下りの時代～ねたみの恐ろしさ

～ヨシュア記13章－サムエル記上25章～

もくじ

第1章　上り下りの時代 …… 1
第2章　ギデオンの召し …… 9
第3章　小さな試験〔テスト〕 …… 17
第4章　サムソン …… 25
第5章　忠実なルツ …… 33
第6章　聞かれたハンナの祈り …… 41
第7章　神様の声を聞くサムエル …… 49
第8章　契約の箱を守る天使 …… 57
第9章　ひとと同じようになりたがる …… 65
第10章　高ぶりはじめたサウル王 …… 73
第11章　神様が新しい王を選ぶ …… 81
第12章　ダビデとゴリアテ …… 89
第13章　ねたみの恐ろしさ …… 97

第1章
上り下りの時代

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「・・・あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」。
ーヨシュア記 24：15

日曜日

イスラエルの人々は、どの戦いでも勝利をおさめていました。そして、自分たちの力強い神が助けて下さっているからだということは、だれもが知っていました。

敵の多くは、戦いに出てくるとき、馬や戦車に乗ってやってきました。イスラエルの人たちは、敵を捕虜にして彼らの持ち物や乗り物を奪い、自分たちで使うこともできたはずです。けれども神様が、そうしてはいけないとおっしゃいました。かれらは、馬や戦車のおかげで戦争に勝てたと考える危険がありました。しかし本当は、神様が彼らを助けておられたから勝てたのでした。それだから、イスラエル軍は、カナンの邪悪な都市との戦いに勝利できたのでした。

カナンにはまだ倒すべき強力な敵がいましたが、そのころには、イスラエル人がカナンのほとんどの地域を治めていました。こうして、戦争はしばらくの間なくなりました。それぞれの部族でカナンの地を分けるのに、ちょうどよい時でした。土地を分けたあとは、神様がふたたびイスラエル人を助けて、のこりの敵を追い払うことになっていました。もしかれらが神様の力に信頼して、忠実に自分たちの役割をはたすなら、そうなる日も遠くはありませんでした。

神様は、それぞれの部族に割り当てられた土地を示される前に、昔モーセがある人にした約束をヨシュアに思い出させました。それは、勇敢なスパイ〔密偵〕であったカレブとの約束でした。45年前、かれはヨシュアとともに、よい報告をしました。今やイスラエルにおいて、カレブとヨシュアは、いちばん年上の長老になっていました。モーセはカ

レブに、カナンに入ったら土地を与えると約束していました。そして今、その約束が果たされるべき時がきていました。

カレブが何をお願いしたか、わかりますか？だれも征服できないだろうとスパイたちが考えていた場所を、かれは希望したのでした。そこには巨人たちが住んでいて、そこの都市は、守りがとてもしっかりしていました。そのような都市を征服することによって、カレブは若いイスラエルの人たちに、敵を追い出すのはそんなにむずかしくないことを示そうとしていました。ただ、力強い神様に信頼するだけでよかったのです。ヨシュア記 14：10－14。

考えてみよう：神様は、こんにちも同じように力強いおかたですか？神様に忠実に生きてきたお年寄りの知り合いがいたら、その人から、神様に助けられたお話を聞いてみてください。

月曜日

そのころ、幕屋〔聖所〕はどこにありましたか？レビびとたちは、どこに住んでいましたか？モーセは、逃れの町と呼ばれる場所を、いくつかつくるようにと言っていました。それは、なんのためでしたか？

しばらくのあいだ、幕屋はギルガルというところにありました。そこは、ヨルダン川をわたったイスラエル人たちが、最初に宿営したところでした。それから幕屋は、カナンの中心に近い、シロというところに移されました。そこに敵はいなかったので、安全に礼拝をすることができました。

レビびとたちは、ほかの部族に割り当てられたところに住んで、なおも幕屋に関する仕事をしていました。かれらは、いくつの都市に住んでいましたか？ヨシュア記 21：41。

レビびとの住んでいた都市のうち、六つは、逃れの町と呼ばれていました。民数記 35：6。逃れの町は、ヨルダン川の両側に三つずつありました。どこに住んでいる人でも、それらの都市のどれかに、1日でたどり着くことができました。それは、なんのためでしたか？ヨシュア記 20：9。

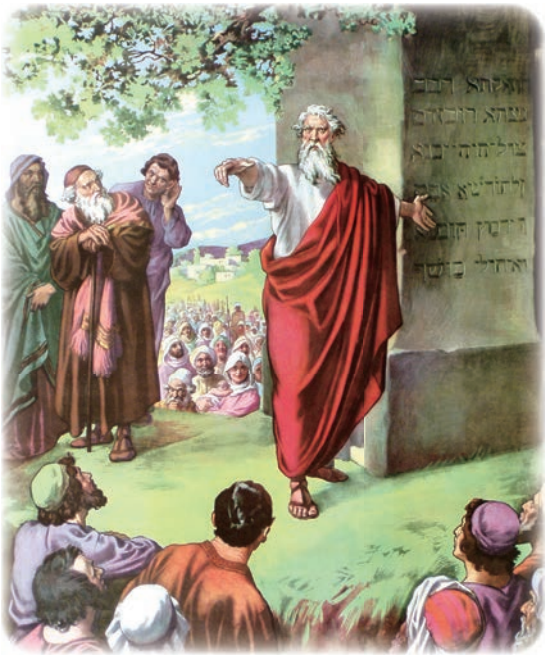
人々は、逃れの町について聞かされていました。潔白な〔悪いことをしていない〕人が危ない目にあったら、いつでもそこに安全に逃れることができたのでした。

考えてみよう：神様こそ、私たちをサタンから守ってくださる避難所〔隠れ家〕であることを、逃れの町は教えていました。いつでも私たちは神様のもとに逃れ、サタンの攻撃から守られます。さらに神様は、サタンが私たちにもたらそうとする第二の死からも、逃れられるようにしてくださるのです。詩篇 9：9と 121：7－8。

火曜日

このころ、ヨシュアは 100 歳をこえていました。これほどの年齢になっても、かれは、イスラエルの人たちのことが気にかかっていました。彼らの多くは、神様の言いつけにしたがっていませんでし

た。悪いカナン人たちを完全にやっつける手助けをすると神様が約束しておられたのに、かれらは自分たちがやるべきことをしていませんでした。いろいろな言い訳をして、敵をやっつけようとしなかったのです。カナン人たちと友だちになるイスラエル人も、多くいました。またある人たちは、こっそりかれらの偶像を拝んでいました。ヨシュアが心配で気がかりになったのも、無理はありません。かれらのことを、とても愛していたのですから。



ヨシュアは、エジプトを出てからの長い月日のことを思いました。これまで、じつにいろんなことが起こりました。人々にとって、神様にまったく信頼するのがどれほど大変なことかを、かれは知っていました。かんたんに神様を忘れてしまっても、神様はいつでもがまんづよく彼らを導いてこられたことを、ヨシュアはよく知っていました。

自分が死んだらどうなってしまうのだろうと、ヨシュアは考えました。もういちどイスラエルの人々に話さなくてはと思ったかれは、指導者と民を呼び集めました。ヨシュア記 23：2－3。

ヨシュアはまず、神様がアブラハムに、生まれ故郷を去るように召されたときの話をしました。それから、イサクとヤコブの話をしました。いつの日か、カナンの地は、かれらの子孫のものになることを、神様は約束しておられました。ヨシュアは、アブラハムの子孫である人たちに向かって、今や神様が約束を果たそうとしておられると言ったのでした。

またヨシュアは、かれらがどれほど簡単に、したがう決心を忘れてしまったかを、かれらに示しました。もしそのような生き方をつづけるならば、どうなってしまうかについても、かれらに話しました。人々はなんと答えましたか？ヨシュア記 24：16，20－24。

考えてみよう：いい子になると、約束したことがありますか？約束するのは簡単ですね。しかし、そのような約束を守るのを助けることができるのは、だれですか？神様だけですね。それなら私たちは、神様の助けを、毎日お願いすべきではないでしょうか？

水曜日

集まりのあと、民もヨシュアも家に帰りました。ヨシュアは、やるべきことを忠実に行いましたか？ヨシュア記 11：15。

ヨシュアは、110歳で死にました。イスラエルの人たちは、尊敬する、忠実な

指導者をうしなったのでした。けれども、長老たちが生きているあいだ、人々はどうでしたか？**ヨシュア記 24：31**。ヨシュアとの最後の集まりで、かれらがどんな約束をしたか覚えていますか？もういちど、**24節**を読んでください。

かれらは、約束を守りましたか？神様は、約束を守りましたか？**士師記 1：19**。

結局、**19節**はどういう意味なのでしょう？かれらは本当に、神様の言いつけを行いつづけることができなかったのでしょうか？馬や戦車をこわがる必要はないことを、すでに神様は、はっきりと示しておられました。神様が、かれらの助け主でした。それなのに、神様にとってできないことは何もないことを、すでに忘れていたのです。力は神様からくるものなので、神様に信頼せず、したがっていない間は、とうぜん何もできなかったわけです。

じょじょに、イスラエル人たちは、むかしの状態に戻りつつありました。神様は

はっきりと、邪悪なカナン人とは交わらないようにと、かれらに注意しておられました。それなのに、その言いつけを破ったのでした。かれらは、ほかの神々を拝むようなことはしないと約束していました。それなのに、偶像を拝むようになっていったのです。**士師記 1：32；2：11－13**。

邪悪な神の敵どもは、ますます大胆に〔ずうずうしく〕なっていき、もはやイスラエルとその神様を恐れなくなっていました。しかもイスラエル人たちは、安全で幸福になるどころか、さらに多くの問題を抱えるようになっていきました。それは、かれらのせいでしたか？それとも、神様のせいでしたか？

考えてみよう：もしかしたら、あなたのお父さんとお母さんも、次のように注意してくれたことがあるかもしれませんね。「従ってもしたがわなくても、その結果を刈りとるのは、自分なのだからね」。ですから、従わなかったら、かならず良くない結果をかりとることになるのです。

木曜日

聖書で、ヨシュア記の次はどの書になっていますか？どうしてそれは、士師記という名前になっているのでしょう？士師とは、どのような人たちのことでしたか？

ヨシュアと長老たちが死んだのち、人々はすぐに、神様を愛し、信頼し、したがうと約束したことを忘れてしまいました。カナンの邪悪な人々の近くに住んで、かれ

らと交わってはいけないと、神様は注意を与えておられました。かれらは、その言いつけにしたがいましたか？士師記３：５－７。

そのうち、まるでみんなが、サタンにしたがっているかのように見えるところまで、国中が悪くなってしまいました。そして、神様が警告しておられたとおり、よくない結果が起こってきました。しかしそれでも、神様は忍耐しておられました。

人々が悪かったと思って、ゆるしとあわれみを願ったら、神様はかれらの願いをきいてくださいました。かれらを本当に愛しておられたので、神様は、かれらを助けるために、勇敢な指導者をえらばれました。オテニエルという人物でした。かれは士師、つまり裁き人となりました。ふたたび平和をとり戻し、安全に暮らせるようになった人々は、どんなにありがたく思ったことでしょう！士師記３：９－11。

ところが、オテニエルが死んだのちは、どうなりましたか？従わない道を選ぶとどうなるかについての警告を、イスラエルの人たちは覚えていましたか？ 12 節。

ヨシュアが死んだあとの、しばらくの間だけでなく、長年にわたり、イスラエルの人たちは士師を必要としました。そして300 年以上にもわたり、イスラエルの人たちは、同じ間違いを何度もなんども繰り返したのでした。

士師〔さばきづかさ〕が死んですぐに、イスラエル人たちは、何度もなんど

も神様にそむきました。そうすると、ひどい結果をかりとることになります。そしてどうしようもなくなると、悪かったと思って神様に助けを願い求めるのでした。すると神様は、かれらをかわいそうに思って、別の士師を送られます。士師がかつやくして、国にはふたたび平和がもどってきます。しかし、それもしばらくの間だけで、その士師が死んだあとは、同じ失敗をくりかえすのでした。

考えてみよう：たまに、言うことをきかないで痛い目にあい、泣き出す子供がいます。そのときは、自分のしたことを悪かったと思い、お母さんに助けをもとめます。助けてもらえば、平安がもどってきますが、それで本当に、問題は解決したと言えるでしょうか？あなたが言うことをきかないときでも、お父さんとお母さんが忍耐してくれることを、あなたは感謝していますか？神様も、イスラエルの人たちに対して忍耐なさったように、私たちに対し

て忍耐してくださいます。

金曜日

ヨシュアが死んだあと、何人もの士師たちが、イスラエル人を助けてくれました。まるでだれも、神様を信頼してしたがっていないように思われる時もありました。けれども実際は、イスラエルの国で起こっているさまざまなことを、悲しく思っている人たちが多くいたのです。

こんにちでも同じです。幸福になれる神様の規則〔きまり〕を学ぼうとし、神様の助けによって、これらの規則にしたがおうと努力している人たちは、今でも多くいます。このような人たちは、ほかのクリスチャン仲間が、イエス様の言いつけにしたがおうとしないのを見て、たいへん悲しい思いをしているのです。幸福になるための規則をよく知らずに、これらのきまりを破っている人たちもいますが、中には、規則を知っていながら、したがうことが大事であると思わずに破っている人たちもいます。

神様いがいに、人が心の深いところでどのように考え、感じているかを、分かる人がいるでしょうか?いませんね。ですから、ほかの人の考えが分かっているかのような態度でその人をさばくのは、まちがっています。ほかの人たちがやっていることを見て悲しく思っても、かれらの心の中は分からないのですから、さばいてはいけません。人の心を知り、正しいさばきができるのは、神様だけなのです。

では、私たちはどうすればいいのでしょう?まず、その人がだれであろうと、まちがったことをしている人のまねをしてはいけません。また、もっともっとイエス様に似た者に変えられるために、一人ひとりが神様に助けを求める必要があることも、覚えているべきです。さらに、自分自身のためだけでなく、ほかの人たちのためにも祈るべきです。そして、みんなのよい模範になれるよう、努力すべきです。ほかの人たちに対しては、言葉で注意するよりも、行動で示してあげるほうが、もっと彼らの助けになります。

ほとんどの士師たちは、よい模範となる人たちでした。神様はかれらを用いて、どんなに小さくて害がないように思われる罪でも、サタンはこれらの罪を利用して、人々を滅ぼそうとしていることを、イスラエルの人たちに分からせようとしておられたのでした。

もっと学ぼう！

★ヨシュア記 13 － 24 章
★士師記 1 - 2 章；3：1－6
★人類のあけぼの下巻 p. 137-191

ジェシカおばさんの選び—パート1

エイミー・シェラード

ジェシカおばさんは、久しぶりに三人の姪〔兄弟姉妹の娘〕たちの家族を訪れようとしていました。もう大人になっていた姪たちには、合わせると七人の子供たちがいて、全員女の子でした。たがいに姉妹であり、いとこ同士である彼女たちは、ジェシカおばさんが来るのをとても楽しみにしていました。大おばさんである彼女に、いちども会ったことはありませんでしたが、話にはよく聞いていたので、もうすでに、彼女のことをよく知っている気になっていました。ひとつはっきり分かっていたのは、ジェシカおばさんがとてもお金持ちであるということでした。これまで彼女は一人ひとりに、誕生日やクリスマスのカードやプレゼントを、なんども送ってくれていました。そしてついに、ジェシカおばさん本人に会うことになったのでした。

手紙の中で、ジェシカおばさんは、「いちばん駅に近い、サマーフィールド家で会いましょう。長くはいられないので、みんな午後4時半までには集まってくださいね。三人の姪たちに会いたいし、夏休みには、七人の女の子たちの中からひとり選んで、カリフォルニアへいっしょに旅行したいと思っています。」

女の子たちがわくわくしていたのも、無理はありません。みんな学校が終わると、サマーフィールド家方面のバス乗り場へと急ぎました。ジェシカおばさんは時間におくれるのが嫌いなことを、お母さんたちはよく覚えていて、学校が終わったらぐずぐずしないで急ぐようにと、女の子たちに注意していました。

バス乗り場に向かって歩いているあいだ、女の子たちは、ジェシカおばさんのことを話したり、カリフォルニア旅行にはだれが選ばれるかなどについて話したりしていました。

サリー・ブロンソンは、「私がいちばん年上よ!」と誇らしげに言いました。「だから、旅行には私が選ばれると思うわ。」

すると、ジェシカ・サマーフィールドが、「でも、私がいちばんおばさんに似ているって、お母さんたちが言ってたわ」と笑いながら言いました。「だから、私が選ばれると思わない?」

サリーの妹のロレッタも負けてはいません。「きっと私が選ばれるはずよ。だって、私はいちばん年上でもなく、いちばんおばさんに似ているわけでもなく、おばさんと同じ名前でもないからよ。」

おまけに彼女が、「カリフォルニアから、みんなに絵はがきを送るわね」と言ったので、みんな大笑いしました。

だれもが、あのすてきな旅行に自分が選ばれるべき理由を考えていました―ベス以外のだれもが。

「ベス、あなたはどうなの?」マイラ・サマーフィールドがたずねます。「ジェシカおばさんは、あなたを選ぶんじゃないかしら?」

ベスは、いとこたちに追いつこうとけん命に歩きながらも、なんども後ろをふり返っています。ベスが口をひらきました。「ごめんなさい!よく聞いてなかったの。あそこのグレーの服を着たおばあさんが気になって。見て、青い羽かざりのついた帽子をかぶっているおばあさんよ。なにかとても心配して、困っているように見えるんだけど。」

「もう、ベスったら!」いとこのアンがせかします。「あのおばあさんだったら、きっと大丈夫よ。たぶん、だれかを待っているんだわ。おくれたら、お母さんにしかられるわ。急ぎましょう。」

「いいえ!」ベスは決心しました。「私は、あのおばあさんが本当に大丈夫かどうか、見に行ってくるわ。みんなは先に行ってちょうだい。あとで追いつくから。だめなら次のバスで行くわ。」

アンは首を横にふってから、ほかのいとこたちと急ぎました。「まったく、ベスらしいわ。言っても聞かないんだから。」アンがそう言うと、ほかの女の子たちはうなずきました。

（つづく）

第2章
ギデオンの召し

暗唱聖句

「わたしが恐れるときは、あなたにより頼みます」。
—詩篇 56：3

日曜日

イスラエルの人たちは、ふたたび苦しい目にあっていました。こんどは、大変な苦しみでした。ですから、すぐにでも助けが必要でした。

邪悪で残酷なミデアン人たちが、たびたびイスラエルに入ってきては、畑を荒らしたり、だいじな食べ物をうばったりしていました。イスラエル人の家畜〔動物〕をうばったり、殺したりもしていました。イスラエルの人たちは、このいじわるなミデアン人と戦って、敵を追い払おうとしましたが、そのたびに負けてしまっていました。その結果、多くのイスラエル人が殺されてしまいました。もはや自分の家にいるのは安全でなくなったので、人々は敵に見つからないように逃げ隠れしていたのでした。

一体どこに隠れていたのでしょう?どうして、こんなに苦しい目にあわなければならなかったのでしょう?**士師記6章の1節と2節**を読んでください。

聖句の初めに、問題の原因が書かれていますね。イスラエルの人たちにはなんども注意していましたから、サタンにしたがうことを選んだかれらを、神様は祝福することができなかったのです。

これと似たようなことは、前にもありましたか?そう、ありましたね。

これと同じような問題は、これまでに何度もなんども起こっていました。まず、民が神様にしたがわず、そのために悩み

苦しむことになります。すると人々は悪かったと思って、神様に助けを求めます。そのとき人々は、神様の規則に従うことを約束します。そのようなかれらを神様は憐れんでくださり、しばらく平和に過ごせるようになります。ところがじきに、かれらはまた神様にそむき、同じ問題をくりかえすのです。このとき、神様はどうなさいましたか？士師記 6：7－10。

預言者の言ったことは、すべて本当でした。こんどこそ神様は、かれらを苦しむままに放っておかれたでしょうか？それが、当然の報いでしたから。神様がどうなさったかについては、明日学んでいきましょう。

考えてみよう：神様は、仕返しをしたがりますか？もしだれかに傷つけられたら、私たちは、その人を傷つけたいと思うことがよくあります。神様もそうでしょうか？それだから神様は、イスラエルの人たちを祝福なさらなかったのでしょうか？

月曜日

ギデオンは、強くて勇敢な若者でした。ある日かれは、静かな場所に隠れて仕事をしていました。ミデアン人に見つかりたくなかったからです。だれにも見つからないと思っていた場所で、かくしていた麦の脱穀〔殻を穂からとりはなす作業〕をしていたのでした。

なぜイスラエル人は、こんなに苦しまなくてはいけないのだろうかと、ギデオンは考えていました。どうしてミデアン人を追い払うことができなかったのだろう？兄さんたちは、ミデアン人と戦って、みんな死んでしまった。今や家族の中で、残っている息子は自分だけになった。なぜ神様は、イスラエル人を勝たせてくださらなかったのだろう？

仕事と考えごとに夢中になり、ギデオンは、見知らぬ人があらわれて、近くの木の下にすわっていることに気づきませんでした。見知らぬ人が話しかけたので、ギデオンは、びっくりして目をあげました。見知らぬ人はなんと言いましたか？そして、ギデオンはなんと答えましたか？士師記 6：11－13。

それから、見知らぬ人はギデオンをまっすぐ見つめて、ふたたび何かを言いました。14 節。

これまでギデオンは、なんどもミデアン人と戦っていて、すでに敵からも味方からも、勇敢な戦士として知られていました。しかし彼自身は、自分がイスラエル軍の大将になろうとは、夢にも思っていませんでした。ギデオンはどのような返事をし、

さらに見知らぬ人は、どのように答えましたか？ 15－16節。

話を聞いているうちに、この見知らぬ人は、ただ者ではないことが分かってきました。しかし、本当にだれなのだろう？その人は、神様からのメッセージを語っていたのだろうか？もしかしたら、天使なのだろうか？つぎに、ギデオンはどんな質問をし、見知らぬ人はどのように答えましたか？ 17－18節。

考えてみよう：供え物をとりに家へ帰る途中、ギデオンはどんな気持でいただろうと思いますか？困っていた？恐れていた？それとも、わくわくしていたでしょうか？さぞ、見知らぬ人の正体を知りたいと思ったことでしょう。

火曜日

供え物を用意しに家へと急いでいたギデオンは、多くのことを思いめぐらしていたことでしょう。家へ帰って戻ってくるのに、しばらく時間がかかりましたが、ようやく準備ができました。

テレビンの木のところに戻ってくると、見知らぬ人は約束どおり、ギデオンを待ってくれていました。士師記 6：19－20。

ギデオンは言われるままに、岩の上に食べ物をおいて、その上にスープをかけました。それからかれは、見知らぬ人が杖を伸ばして、それにさわるのを見ていました。すると、何が起こりましたか？ 21節。

するとすぐに、ギデオンは、自分が神様と話していることが分かりました。雲の中からイスラエル人を導き、これまで何度もなんども、ご自分の民のためにものすごい奇跡を行なわれた神様です。そのことに気づいたギデオンは、どんな気持ちになりましたか？ 22－23節。

もし神様が、とても輝かしい姿であらわれておられたら、ギデオンは死んでしまったことでしょう。しかし神様は、ギデオンが怖がらないように、また死ぬことのないように、ご自分の栄光を隠されたのでした。もしギデオンが神様に信頼するなら、神様はかれを用いて、イスラエル人を邪悪で残酷な敵から自由にしてあげるつもりでした。ギデオンはどのようにして、尊敬と感謝の心をあらわしましたか？ 24節。

考えてみよう：ギデオンは、自分がつくった祭壇を「主はシャローム」と呼びました。つまり、「主は平和」という意味です。私たちの世界には、平和のない場所も多くありますが、イエス様を選び、かれの助けに頼って、幸福の規則にしたがうことを選ぶなら、私たちは歩くのを恐れる必要があるでしょうか？

水曜日

ギデオンが、残酷な敵であるミデアン人からイスラエル人を自由にするのを助けてくださると、神様はすでに話しておられました。しかしその夜、神様はふたたび語られたのです。そしてギデオン

に、つぎに何をするように言われましたか。士師記 6：25 － 26。

神様がやるようにとおっしゃったことは、どちらかといえば恐ろしいことでした。毎朝、町の人々は、かれの父親がつくった祭壇のところへ行き、バアルの神を礼拝していました。その祭壇と偶像がこわされているのを町の人たちが見たら、まただれがそれをやったかを知ったら、かれらはカンカンに怒って自分を殺すだろうと、ギデオンは思いました。

しかしそれでも、こんどの新しい指導者は、偶像の神を拝むことも頼ることもしないということを、イスラエルの人々に分からせる必要がありました。その人物は、本当の神様だけにしたがうということを、みんなに分からせなくてはいけませんでした。

その夜、ギデオンは 10 人の召使いを起こして、今から自分がすることを彼らに告げました。どうして朝まで待たなかったのですか？ 27 節。

つぎの朝、人々がいつものようにバアルを拝みにやってくると、信じられない光景を目にしました。大事な偶像がなくなっていたのです！祭壇もなくなっていました！代わりに別の祭壇があって、かれらの木の偶像が、その上で燃やされていたのです！人々は、ギデオンの父親に、何をしなさいと言いましたか？ 28 － 30 節。

ギデオンの思っていたとおり、かれの仕業だと知った人々はカンカンに怒って、かれの死を求めました。それでも彼は、神様に信頼してしたがうことを選んだので

した。そして今、神様はどうやって、みんなの考えを変えられるのだろうと、ギデオンは考えたことでしょう。

考えてみよう：あなたも、ギデオンのような、勇敢な人になりたいですか？子供たちは、どうやって勇気を出すことを学んでいくのか知っていますか？したがうことによって、学んでいくのです。とくに、ほかの子供たちがしたがわないで勝手なことをしているとき、自分だけしたがうのは勇気がいります。

木曜日

ギデオンが偶像の祭壇をこわしたので、オフラの人々は怒って、かれを殺そうとしました。父親のヨアシに向かって、「ギデオンをここに引き出せ！」と叫びました。「こんなことをする奴は、殺してしまえ！」といって、かれの命を求め

ました。しかしヨアシは、このことについて思いめぐらしていました。そして人々に向かって、ある質問をぶつけたのでした。質問された人々は、なんと答えてよいか分かりませんでした。士師記 6：30 － 31。

ヨアシの言うことはもっともだ、と思いました。バアルは力ある神であるはずなのに、数人の男たちがその祭壇をこわして、木の偶像を祭壇のまきにするのを防げなかったのです。なんと、情けないことでしょう！町の人々はすぐに考えを変えて、ギデオンを殺すのをやめました。

それぞれの家に戻ったかれらは、バアルを拝むのが、どれほどばかばかしいかを思い知ったはずです。自分で自分を守れない神が、それを拝む人々を守ることができるだろうか？かれらは、すぐにとくべつな守りを必要としていました。かれらの敵は、どのようなことをしていましたか？33 節。

またまた、よくないことが起ころうとしていました。ミデアン人がどれほど邪悪で、残酷で、しかも強力な敵であるかは、もうみんながよく分かっていることでした。

神様は、ミデアン人やアマレク人に対して、忍耐しておられました。何度もなんども、何年もなんねんも、かれらが悔い改めて、悪事をやめる機会〔チャンス〕をあたえておられたのでした。ところが、すべての機会はむだになりました。かれらは天の神様をあざけり、ばかにしたのでした。かえって彼らは、機会のあるたびに、イスラエル人を痛めつけて滅ぼそうと考えていました。そんなことを、神様がおゆるしになると思いますか？いいえ、とんでもないですね。

考えてみよう：敵がどんなに強力であるかを、ギデオンはよく分かっていました。神様から言われたことを思い出したギデオンは、どんな気持ちになっただろうと思いますか？ほんとうに信頼することを、かれは知っていましたか？

金曜日

敵は、何万という大軍でせまってきました。イスラエルが戦うべき時がきたことを、ギデオンは知っていました。かれはまず、何をしましたか？士師記 6：34 － 35。アビエゼル人というのは、ギデオンの氏族の人々で、かれらがまず、ギデオンの軍隊に加わりました。

大勢のイスラエル人兵士があつまりました。それは、ひじょうに大きな軍隊に見えました。しかしそれでも、敵の軍隊と比べたら、とても小さいものでした。ギデオンの軍隊よりも、敵の軍隊は、兵士の数ではるかにまさっていました。

ギデオンは勇敢で強い兵士でしたが、神様が奇跡を起こしてくださらなければ、かれの軍隊は勝ち目がないことを知っていました。神様は、共にいてくださると約束しておられましたが、この戦いはたしかに神様の計画であることを、はっきり知らなくてはならないと思いました。そこで、神様にしるしを求めました。それは、どんなしるしでしたか？36 節と 37 節。

その日の夜、ギデオンはあまり眠れな

かったことでしょう。それでも、つぎの朝は早く起きました。起きてから、最初に何をしたと思いますか?求めていたしるしは、ありましたか? 38 節。

神様は、ギデオンが求めたとおりのことを、してくださいました。ところが、べつの考えがギデオンの心に浮かびます。羊の毛をぬらしたのは、本当に神様だったのだろうか?それとも、羊の毛は水を吸いやすいので、自然にぬれたのだろうか?もし羊の毛だけがかわくようにできたなら、それこそ本当の奇跡だ、とかれは思いました。もう一度しるしをお願いしたら、神様はいやがるだろうか?気がとがめましたが、もういちどお願いすることにしました。39 節。

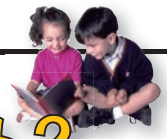
考えてみよう:ギデオンが神様を信頼することができるように、すでに神様はどんなことをしておられましたか?私たちが求めるなら、いつでも神様はしるしを与えてくださいますか?

もっと学ぼう!

★士師記 6 章

★人類のあけぼの下巻 p. 191-195

お話しひろば



ジェシカおばさんの選び―パート2

エイミー・シェラード

ジェシカおばさんに初めて会うことになっていた7人の女の子たちは、約束の場所へと急いでいました。ところがベスは、なにか困っている様子のおばあさんを助けるために、ひとりだけ取り残されたのでした。

ベスは、おばあさんのところへ引きかえしました。「あのー・・・」彼女は思いきって尋ねました。「なにかお手伝いしましょうか?」

上品なおばあさんは、「どうもありがとう!」と叫んでから、つぎのようなお話をしました。「とてもうれしいわ。実は、30分くらい前に、メガネがこわれてしまったの。そしたら、目がよく見えないので、どこへ行ったらいいか分からなくなっちゃって。メガネ屋さんでは、明日まで直らないって言われたの。」

ベスはおばあさんに、「私にできることなら、なんでもお手伝いしますよ」と言いました。「私の腕につかまっていただいたら、どこにでも連れていってあげますから、行きたいところをおっしゃってくださいな。」ちらっと後ろをふりむいたら、もういとこたちの姿はありませんでした。

「まずはどこかに腰をおろして、熱いお茶かなにかを飲んで、落ちつきたいわ。」おばあさんがベスに言いました。「つぎに、郵便局へ行って切手を何枚か買って、手紙をいくつか送りたいの。それからタクシーに乗って、目的地まで行きたいんだけど、お嬢ちゃん、ほんとうに時間は大丈夫なの?」

ベスは、おばあさんの手を引いて、ゆっくりすわってお茶が飲めるお店に案内しながら、「もちろん、大丈夫ですよ」と答えました。

しばらく休んでから、ふたりは切手を買いに郵便局へ行き、手紙をいくつか送りました。それから、タクシーを呼びました。こうして、おばあさんは安全に目的地まで行けることになりました。おばあさんは、タクシーの座席でくつろいでいましたが、きゅうに、はっとして姿勢を正しました。自分を助けてくれた親切な女の子の、名前すら聞いていなかったことを思い出したのです。そのことに気がついて残念に思いましたが、もう手遅れです。

サマーフィールド家では、6人のいとこたちが、リビングの窓から外を見ていまし

た。ジェシカおばさんが来るのを今か今かと首を長くして待ちながら、ベスが遅れやしないだろうかと、はらはらしていたのでした。

「タクシーがきたわ!」家の前にタクシーが止まると、みんながいっせいに叫びました。おばあさんが車から降りるのを、運転手が手伝ってあげています。そのおばあさんは、グレーのスーツを着ていて、青い羽かざりのついた帽子をかぶっていました。女の子たちは、はっと息をのみました。「あっ、あれはベスが助けに行ったおばあさんだわ!あのおばあさんが、ジェシカおばさんだったんだ・・・!」

タクシーが去って、ジェシカおばさんが家に向かって歩き始めると、すぐにもう一台の自動車がやってきました。その車には、ベスと彼女のお父さんが乗っていました。車から降りながら、「ちょうどいいところに、お父さんが通りかかってくれて、本当によかったわ!」とベスが言いました。

前を歩いていたおばあさんは、立ち止まってふりむきました。おばあさんが、「あら、まあ!」と叫ぶと、彼女のほうを見たベスの顔も、おどろきの表情になりました。しかしすぐに、喜びに顔を輝かせたのでした。「その明るい陽気な声で、お嬢ちゃんだとすぐに分かったわ!」それからジェシカおばさんは、ふたたびベスの腕をとり、ふたりでいっしょに家の中へ入っていきました。

ジェシカおばさんが、ベスの耳にささやきました。「いっしょにカリフォルニアを旅行したら、楽しいと思わない?私の行きたいところは、どこへでも行ってくれるんでしょ?返事は、夕食のあとで聞かせてちょうだい。」

夕食後、その日の出来事をみんなに話してから、ジェシカおばさんは、ベスといっしょにカリフォルニアへ行きたいと発表しました。だれもが納得しました。とくに、６人のいとこたちは、ベスのために喜んでくれました。自分のことをかえりみずに、見知らぬ人を助けてあげたベスは、その見知らぬ人であったジェシカおばさんに選ばれるにふさわしいと、だれもが思ったのでした。

第３章

小さな試験〔テスト〕

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「万軍の主は仰せられる。これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」。
―ゼカリヤ書４：６

日曜日

神様はギデオンに、いじわるで残酷なミデアン人からイスラエルを救うようにと頼みました。かれの願いを聞いて、羊の毛をつゆでぬらし、地面をかわいたままにしておくという奇跡もおこなわれました。ところがギデオンは、もうひとつだけ、しるしを求めました。こんどは羊の毛だけをかわいたままにして、地面をぬらすようにとお願いしたのでした。つぎの朝、ようすを見に行ったら、どうなっていましたか？士師記６：40。

もはや、ギデオンの心に疑いはありませんでした。次に、かれは何をしましたか？士師記７：１。

そのころ、イスラエルの人たちは山のほうに野営〔キャンプ〕しており、ミデアン人たちは下の谷間に野営していました。敵のほうを見下ろしたギデオンは、そのとたん、あきらめるように誘惑されたことでしょう。敵の兵隊は、味方と比べてあまりにも多かったからです。しかし、かれは神様に信頼しようと決めていました。神様がかならず一緒にいてくださるという、しるしを与えられたからです。

そのとき、神様が語られました。神様は、ギデオンになんと言われましたか？２節。

ギデオンは、まったく信じられませんでした。兵隊が多すぎるですって？少なくとも、今の２倍はいてほしいくらいなのに！兵隊が

多すぎるなんて、神様はなんてことをおっしゃるのでしょう？

それから神様は、昔モーセにお与えになった、ある律法をギデオンに思い出させました。どのような兵士が敵と戦うべきか、またどのような兵士が家に帰るべきかについて語っている律法でした。戦う時がくるたびに、イスラエルではその律法を読み上げることになっていました。けれども、ギデオンはまだ読み上げていませんでした。敵の兵隊と比べて、こちらはあまりにも少なかったので、これ以上、味方の兵隊をへらしたくなかったのでした。

しかし、神様がしなさいと言われることに、ギデオンは従わなくてはいけません。彼がしたがったら、どんなことが起こりましたか？3節。

三分の二以上の兵隊が帰っていくのを見て、ギデオンはがっかりしました。これで、戦争に勝つ望みはなくなってしまったように思われました。もういちど、ギデオンは選ばなくてはいけなくなりました。神様に信頼しつづけるか、それともあきらめるか？かれはどちらを選びましたか？

考えてみよう：子どもは、ギデオンのような選びをしなくてはいけない時がありますか？本当のことを言うために、勇気がいるときはありませんか？または、だれも正しいことをしようとしないときに、自分だけ正しいことをするのは、勇気のいることではないでしょうか？

月曜日

1 万人の兵隊だけが、ギデオンといっしょに残りました。それは多い数のように思われるかもしれませんが、敵と比べたら、はるかに少ない数でした。神様が奇跡を起こしてくださらなければ、勝ち目はまったくありませんでした。

神様はふたたび、ギデオンに話しかけられました。今度は、なんと言われましたか？士師記 7：4。

ギデオンは、神様に信頼して、したがうことに決めていました。かれは小川を見下ろして、そこにおりて行くよう兵士らに命じました。残すべき兵士と、返すべき兵士を見分ける方法は、神様が教えてくださいました。5節。

1万人の兵士らが水を飲むようすを、ギデオンは注意深く見守っていました。どうしてわざわざ、今いる兵士らをふたつのグループに分けなければならないのだろうと、ふしぎに思ったかもしれません。見ていると、ほとんどの人たちは、ひざをついて口を水につけて飲んでいました。わずかな人たちだけが、手で水をすくって飲んでいました。もうすぐ出て行って、敵と戦うことになるという気持ちのあらわれでした。

みんなが飲み終わってから、ギデオンは、ほんとうに戦いの心がまえができている兵士の数をかぞえました。1万人のうち、どれくらいいたと思いますか？かれらについて、神様はなんと言われましたか？6節

と7節。

今や、ほとんどの兵隊が、荷物をまとめて帰っていきました。残ったのは、たったの300人でした。ギデオンが小高い丘にのぼって見下ろすと、どのような光景が目にはいりましたか？12節。

考えてみよう：もしギデオンが神様に信頼しようと決心していなかったら、どのように感じたことでしょう？こわいと感じるようなときでも、イエス様は私たちに、何を学んでほしいと望まれますか？

火曜日

次の日に、神様が300人だけを使って戦いに勝たせようとしておられるとは、ギデオンにとっても信じにくいことでした。どう考えても、不可能〔できないこと〕としか思われません。

ギデオンがどんな気持ちであったか、神様はご存じだったと思いますか？もちろんです。そこで神様は、彼に何をするようにとおっしゃいましたか？士師記7：9－11。

ギデオンは、しもべを連れて、こっそりと丘を下っていきました。天使たちが、敵の陣営のはしにあるテントまで、かれらを案内したのでしょう。そこまでやってきたら、敵の兵士たちの話し声が聞こえてきました。13節、14節。

ひとかたまりの小さなパンが、軍隊をやっつける？これでギデオンは、恐れる必要はなにもないことが分かりました。すばらしい方法で、やさしくそのことを教えてくださった神様に、しずかに感謝しました。それから二人は、こっそりその場を離れ、味方の陣地に戻っていったのでした。15節。

神様は、次にやるべきことを、ギデオンに話されました。そこでかれは、急いで300人の勇敢な兵士らを起こしました。それから一人ひとりに、あるものを手渡したのです。受け取った兵士たちは、いったいそれらを使って何をするのだろうと、ふしぎに思ったことでしょう。手渡されたものとは、なんだった

のでしょう？ 16節。

それぞれの兵士は、片手にたいまつを入れたつぼ、もう一方の手にラッパを持たされました。敵と戦うために、あのようなものを持っていく兵隊の話なんて、だれも聞いたことがありませんでした。神様はどうやって、約束を守ろうとしておられたのでしょうか？

考えてみよう：この時までに、ギデオンと兵士らは、神様が必ず勝たせてくださると確信していました。不安は何もありませんでした。あなたが神様の導きに頼るときも、心配する必要は何もありません。そうではないでしょうか？

水曜日

真夜中、すっかり戦いの準備ができた、ギデオンと300人の勇敢な男たちは、丘の上に立っていました。丘のふもとの谷間では、敵の兵士たちがぐっすり眠っていました。ギデオンの兵士一人ひとりは、片手にたいまつの入ったつぼと、もう一方の手にラッパをもっていました。

ギデオンの説明を、みんなが注意ぶかく聞いていました。かれの言うとおりにしなければいけないことを、知っていたからです。士師記7：17－18。

それからギデオンの兵士らは、しずかに丘をおりました。ちょうど敵の見張りがこうたいしたころ、イスラエル兵は、敵の陣地をぐるりと囲みました。あとは、とつげきの合図を待つだけです。

ギデオンがラッパを吹き鳴らすと、みんながそれにつづいてラッパを吹き鳴らしました。それから、つぼを地面に投げつけてわると、中に入っていたたいまつが、あかあかと燃えだしました。そして、敵に向かって走りながら、いっせいに「主の剣、ギデオンの剣！」と叫んだのでした。19節、20節。

眠っていた敵の兵隊は、いっせいに目をさましました。大いに、あわてふためいています。まわりで燃えているたいまつを見て、けたたましいラッパの音と叫び声を聞いたかれらは、自分たちが、とてつもない大軍におそわれたと思ったのでした。敵の兵士らは、暗やみの中、クモの子を散らすように逃げ出しました。互いにぶつかり合い、敵だとかんちがいして、味方どうしで戦っている者までいました。生き残った敵は、できるだけ早く、ヨルダン川をわたって逃げようとしていました。21節、22節。

考えてみよう：神様にとって、不可能な〔できない〕ことは何ひとつないことが示されましたか？今でも神様は、あのときと同じ力をお持ちですか？そうだとしたら、私たちはそのことを喜び、その大きな力に頼るべきではないでしょうか？

木曜日

神様がギデオンに勝利を与えられたとの知らせは、家に帰ろうとしていたイスラエル兵たちにも、すぐに伝えられました。かれらが引き返してきたので、まもなく、何千何万というイスラエル兵が、

敵を追い回していました。

ミデアン人たちがヨルダン川を渡ろうとすることを、ギデオンは知っていました。かれらは、できるだけ水の浅くなっているところに群がっていました。すでに渡った者たちもいました。そのときギデオンは、何をしましたか？士師記 7：24。

ちょうどそのころ、エフライム族の人たちがヨルダン川にやってきて、渡ろうとしていたミデアン人に追いつきました。

戦いに敗れたミデアン人は、その後どうなったと、聖書に書かれていますか？士師記 8：28。

くたくたに疲れていながらも、とてもうれしい気持ちになったことはありませんか？ギデオンと 300 人の兵士らは、まさにそのような気持ちでした。おなかはペコペコでしたが、心は感謝の気持ちでいっぱいでした。

長いあいだミデアン人にいじめられていたイスラエル人でしたが、かれらはその後、どれくらいのあいだ平和に過ごしましたか？ 28 節。

考えてみよう：神様はふたたび、ご自分の民のために、すばらしい奇跡を行ってくださいました。イスラエルの人たちは、この神様のご恩を、決して忘れなかったでしょうか？ここで、神様が毎日与えてくださるたくさんの祝福について、考えてみてください。いくつか書き出してみましょう。これらの祝福を、神様に感謝しましたか？

金曜日

私たちのだれもが、ギデオンと 300 人の兵士の物語が大好きですね。かれらを用いて、神様がミデアン人を打ち負かされたところは、いつ聞いてもすかっとします。あのいじわるだった敵は、こてんぱんにやっつけられてしまい、もう二度とイスラエル人を悩ますことはありませんでした。

さて、3 万人以上もいた兵隊の中から、神様がどのように 300 人を選ばれたのかを考えてみましょう。神様は、一見おかしな方法で、かれらをお選びになりましたね。かれらの水の飲みかたは、何を物語っているでしょうか？ほかの兵士たちとの違いはなんでしたか？

私たちのふだんの話しかたや行動が、たとえ小さなことに思われても、大きな違いをもたらすことはないでしょうか？

ギデオンの兵隊について勉強すると、

小さなことから多くのことを学びます。私たちも、たとえ小さなことであっても、神様に喜ばれるような生き方をつづけるなら、大人になるまでに大きな違いをもたらすことでしょう。イエス様も、私たちの両親も、私たちの幸福を望んでいます。毎日かれらは、どうすれば幸福になれるかを教えてくださっています。

考えてみよう：私たちは、どのようなときに、人生の大切なことを学んでいるでしょうか？

- 朝、親から起こされて、すぐに起きるとき。
- 相手を押しのけてまで、一番になろうとしないとき。
- 文句を言ったり、めそめそしたり、すねたりしないで、おうちのお手伝いをするとき。
- 小さなうそでもつかないようにするとき。
- 大きなデザートを自分がとろうとしないで、べつの人にゆずるとき。
- いちいち言われなくても、自分のできることに気づいて、進んでしてあげるとき。
- 自分が使ったものを、きちんと片づけるとき。
- 礼儀正しくするとき。
- 親切な言葉づかいをするとき。

ほかにも何かあるか考えてみましょう。

もっと学ぼう！

★士師記７章

★人類のあけぼの下巻 p. 194-207

口笛を吹くデイビー——パート 1

エイミー・シェラード

赤い髪をした、そばかす顔の男の子、デイビー・バーンズは、お母さんが死んでしまったので、たったひとりの親戚である、年老いたトビーおじさんにあずけられることになりました。トビーおじさんは、くつの修理屋さんでした。おじさんは、デイビーをかわいがってくれました。貧しかったけれども、デイビーのためにできるだけのことをしてくれました。

生きていたころ、デイビーのお母さんは、口ぐせのようにこう言っていました。「デイビー、もしお母さんのお手伝いがしたかったら、口笛をいっぱい吹いてね。」また彼女は、亡くなる〔死ぬ〕前の日にも、「デイビー、人に優しくほがらかでいられるよう、イエス様に助けをお願いして、口笛をいっぱい吹くと、かならず幸せになれますよ。あなたが夢見ているよりも、もっと幸せに」と言ったのでした。そういうわけで、デイビーは、どんなにつらくて悲しいときでも、いつも口笛を吹いていました。

安息日になると、トビーおじさんは、「さあデイビー、遅れないように教会へ行きなさい」と言いました。服はみすぼらしくて、献金するお金もありませんでしたが、デイビーは教会へ行けることがうれしくてたまりませんでした。かれは特に、安息日学校が大好きでした。

ある安息日、教会が終わって、トビーおじさんの仕事場に向かってゆっくり歩きながら、デイビーは考えごとをしていました。こんどの安息日には、教会で 13 回献金をささげることになっていました。お友だちのみんなも、その特別な献金のために、お金を用意してくるはずでしたが、デイビーにはお金がありません。どんなにか、みんなといっしょに 13 回献金をささげたいと思ったことでしょう!

月曜日になって、デイビーは、学校が終わってから、なにかお金をかせぐ仕事はないだろうかと、トビーおじさんに相談しました。トビーおじさんは、「その気があれば、方法はあるよ」と言いました。

そこで、学校が終わってから、デイビーはいろんな人に、お手伝いはいりませんかと尋ねて回りました。ところがだれも、デイビーの手伝いが必要だと言ってくれる人はいませんでした。それでもデイビーは、「こうなったら会う人みんなに、そうじでも、皿洗いでも、どんな用事でもいい

から、手伝わせてくださいとお願いしよう」と決心したのでした。

それから彼は、ダローさんという女の人に出会いました。彼女は、人里離れたところの大きなレンガ造りの家に、お手伝いさんといっしょに住んでいました。彼女は教会や牧師さんが嫌いな人で、とくに男の子が大嫌いであることを、デイビーは知りませんでした。ただかれは、13回献金に間に合うように、お金をかせぎたかっただけでした。

デイビーは、ダローさんに向かって礼儀正しく、「あのー、なにか僕に仕事をくださいませんか?」と尋ねました。「お金が必要なんです。」

「やれやれ!お金、お金、お金!近ごろは、会う人だれもがお金を欲しがって!私がお金持ちだといううわさを、だれかが広めたみたいだけど、あいにく、人さまに施すお金なんかないわ。とくに物乞いをする少年にはね!」

「でも、僕は物乞いではありません」と、デイビーは答えました。「仕事をして、お金をかせぎたいだけです。」

「それじゃあ、お金をかせぐことができたら、そのお金で何をするつもりなの?」ダローさんが、つめよります。

「僕はただ・・・」答えようとしたら、デイビーは急にこわくなりました。

「なんですって?言ってごらんなさいよ。」ダローさんの目は、つり上がっています。デイビーは、逃げ出したくなりました。

「僕は、そのお金を神様にささげたいんです。」やっとの思いで答えてから、デイビーは逃げ出してしまいました。

「よく聞き取れなかったわ。だれにささげたいですって?」ダローさんはデイビーを呼び止めましたが、彼はもうどこかへ行ってしまいました。

（つづく）

第4章

サムソン

子供のための日々の
聖書研究ガイド

暗唱聖句

**「悪しき者は自分のとがに捕らえられ、
自分の罪のなわにつながれる」。一箴言5：22**

日曜日

またもやイスラエルの人たちは、前と同じような問題をかかえていました。こんどは、だれに悩まされていましたか？士師記13：1。

イスラエルの人たちみんなが、神様を忘れていたのでしょうか？いいえ。多くはありませんでしたが、いつの時代にも、神様に真実で忠実な人たちはいました。その中に、マノアとその妻がいました。

ある日、マノアの妻が、あわてた様子で、夫をさがしにやってきました。びっくりするような知らせを、できるだけ早く伝えたいと思ったのでした。6節と7節。

ついに、自分たちの子供が生まれるとの知らせでした。しかも、特別な赤ん坊だというのです。男の子は成長して、イスラエル人をペリシテ人から解放する人になるというのです！この夫婦がどんなに感激したか、想像できますか？

マノアの妻に話しかけた男の人は、丈夫で健康な子をうむために、彼女がやるべきことを告げました。しかしマノアは、自分たちがすべてのことをきちんと守っているかどうかが知りたくて、その人に尋ねました。どんな質問をしましたか？神様は、かれの祈りに答えてくださいましたか？8節から13節。

ギデオンのように、マノアとかれの妻も、自分たちが会った人は特別な使者だとわかりました。けれども、その人がイエス様であっ

たことは知りませんでした。15節から23節までを読んでください。

考えてみよう：イエス様は、この母親となる人に、丈夫で健康な子をうんで育てるために、やるべきことをお告げになりました。あなたの両親も、健康になる生き方を教えてくれることを、あなたは喜んでいますか？

月曜日

赤ん坊がうまれて、マノアとかれの妻は、その子になんという名前をつけましたか？士師記13：24。

一生けんめいサムソンを育てているマノアとその妻を、神様は祝福してくださいました。いつか、その子が強くて勇敢な男になって、イスラエル人を助けるようになることを、かれらは知っていたのです。

ところがサムソンは、大きくなってから、いくつかまちがった選びをするようになりました。神様の敵であるペリシテ人らと、友だちになったのです。しかもペリシテ人の女に恋してしまいました。テムナという町に住んでいる女と、結婚したいと思うようになったのです。

サムソンがそのことを両親に話すと、かれらはもちろん反対して、それがまちがっていることを分からせようとしました。ところがかれは、「私は彼女が気にいったから」と言って、神様が喜ばれることではなく、自分が喜ぶことをやったのでした。

サムソンは、大変な力持ちでした。かれがテムナに向かう途中で起こった事件を読んでください。士師記14：5－9。

サムソンは、ライオンとハチミツのなぞなぞを思いついて、自分の結婚祝いのとき、30名のペリシテ人の若者になぞなぞを出しました。それから、1週間のうちになぞなぞがとけたら、サムソンがみんなに着物をプレゼントすることになったのでした。けれども、もしなぞなぞがとけなかったら、かれらがサムソンに着物をプレゼントすることになりました。明日の学びで、どうなったか見ていきましょう。

考えてみよう：自分が力持ちであることを、サムソンはどうやって見せびらかしましたか？自分が弱い人であることを、かれはどうやって示すことになりましたか？

火曜日

サムソンの考えたなぞなぞは、つぎのようなものでした：食べる者（ライオン）の中から、食べ物が出てきて、強い者（ライオン）の中から、甘いものが出てきた。

結婚のお祝いに来ていた30人の若者は、なぞなぞをとくことができなかったので、サムソンの妻に、答えを聞き出すようたのみました。それをしなければ、かれらはどうすると言いましたか？士師記14：

15。

サムソンは、自分の両親にも、なぞなぞの答えを教えていませんでした。しかしとうとう、妻に答えを教えてしまったのです。それを聞いた彼女は、もちろん、教えないと殺すとおどかしていた男たちに、答えを教えました。かれらが得意そうに答えを言ったとき、サムソンは、妻に裏切られたことがわかりました。そこで、かれはどうしましたか？ 19節。

しばらくして、サムソンがテムナにもどってくると、自分の妻がほかの男と結婚したことを聞きました。かれは怒り狂って、テムナじゅうの麦畑とブドウ園とオリーブ畑を燃やしてしまいました。士師記 15：4－5。

こんどは、ペリシテ人たちがカンカンに怒りました。戦いが起こり、サムソンは、おおぜいのペリシテ人を殺しました。それからかれは、大きな岩壁にあるほら穴へ行きました。士師記 15：6－10。

けっきょく、サムソンの結婚は失敗に終わりましたね。

あのとき、もしイスラエルの人たちがサムソンの味方になっていたら、かれらは、いじわるなペリシテ人たちから自由になれたことでしょう。ところが、かれらはおくびょう者でした。かれらはサムソンの隠れ場所を知っていたのに、かれといっしょにペリシテ人と戦おうとはしないで、敵のいいなりになってサムソンを捕まえにやってきました。

サムソンは、自分の国の人たちと戦おうとはしませんでした。かれは丈夫なロープで自分を縛らせて、敵にひきわたされました。ペリシテ人たちは、もちろん大喜びしました。さて神様は、敵が勝利するのをおゆるしになりましたか？それから何が起こりましたか？ 14－16節。

考えみよう：あのペリシテ人との戦いのとき、サムソンは、かれに力を与えられるのは神様であることを覚えていましたか？それとも、自分の力で勝ったといっていばりましたか？心を低くするのといばるのとでは、どちらがたやすいですか？

水曜日

サムソンが千人のペリシテ人を殺したとき、かれは、自分の力でそれをやったと言いました。ものすごく力の強い人でしたが、はたして、神様が助けてくださらなくても、同じことができたでしょうか？聖書になんと書かれていますか？聖霊が、かれに力を与えたと書かれてい

ますね。士師記 15：14。

あの長い戦いのあと、サムソンは、とてものどがかわきました。かわきをいやし、力をとりもどすのに水が必要でしたが、どこにも水が見あたりません。

神様の助けがなければ、いともかんたんに死ぬかもしれないと思いました。その時サムソンは、ペリシテ人と戦っているときにも、神様の助けがなければ殺されていただろうということに気づいたのでした。かれは何をしましたか？ 18 節。神様は、かれの祈りにどう答えられましたか？ 19 節。

私たちが神様に信頼しようと決心するとき、神様に解決できない問題はなにもないことが、ふたたび示されたのでした。しかし悲しいことに、神の民は、なんどもそのことを忘れてしまいました。

神様は、サムソンをながく忍耐〔がまん、辛抱〕なさいましたか？そのとおりです！神様に勝利させてもらったあとも、サムソンには、ペリシテ人との問題がまだ残っていました。しかし、神様はかれを愛しておられたので、かれをなおも耐え忍ばれました。神様は、私たちに対しても、耐え忍ばれますか？

考えてみよう：だれでも、つい自慢したくなることはありませんか？聖霊の力によっていいことをしたときでも、神様に感謝し、賛美するのを忘れることはありませんか？

木曜日

サムソンは力持ちでしたが、弱い人でもありました。かれの弱点をよく知っていたサタンは、どうすればかれを誘惑できるかも、よく知っていました。サタンは私たちの欠点もよく知っているので、いつでもそこをつついて誘惑してくるのです。

ある日、サタンはサムソンを誘惑し、ガザという町にいるペリシテ人の女を訪ねさせました。ガザに住んでいるペリシテ人たちは、サムソンが町にやってきたのを見て喜びました。こんどこそ、かれを捕まえることができると思ったからです。本当にそうでしたか？士師記 16：3。

次の朝、ガザの人々は、びっくりしたことでしょう。町の門が、なくなっていたのです！しかし、ペリシテ人たちはあきらめませんでした。しばらくたってから、サムソンが別の女のところへ行ったことが分かりました。その女の名は、デリラといいました。ペリシテ人たちは、もし彼女がサムソンを捕まえるのを手伝ってくれたら、た

くさんの報酬をあげると約束しました。4節と5節。

デリラは承知しました。まず、サムソンの力の秘密を聞き出すことが、彼女の任務でした。くる日もくる日も、デリラは、力の秘密を教えるようサムソンにせがみました。そのあいだずっと、ペリシテ人たちは、かれをとらえる機会をうかがっていました。

最初、サムソンはデリラに、7本の新しくて丈夫な弓弦〔弓にはる糸〕で体をしばったら、力がとりさられると教えました。彼女はそのとおりにしましたが、どうなりましたか？9節。

次にサムソンは、新しくて丈夫な縄を使うように言いました。しかし、前と同じことが起こりました。

それからデリラに、布を作るときに織られる糸のように、かれの長い髪をはたおり機で織ったら、力がなくなると言いました。彼女は、サムソンが眠っているあいだにそれをしてから、「サムソン、ペリシテ人がやってくるわ」と叫びました。このときも、かれはいとも簡単に、はたおり機から髪の毛をひきぬいたのでした。

考えてみよう：「火遊び」という言葉を聞いたことがありますか？それは安全な遊びですか？サムソンは、誘惑を受けたとき、まじめに神様の助けを祈りもとめないで、誘惑をもてあそんでいました。それはまるで、火遊びのようなものです。やめないでつづけていたら、そのうち痛い目にあうのでした。

金曜日

デリラがくる日もくる日もしつこく聞いてくるので、サムソンは飽きあきしてしまいました。とうとうかれは、誘惑に負けて、ほんとうのことを教えてしまいました。かれは、なんと言いましたか？士師記16：17。

こんどこそデリラは、まんまと力の秘密を聞き出せたと思いました。そしてすぐに、そのことをサムソンの敵に知らせたのでした。18節。

サムソンが眠っているあいだに、デリラはかれの髪を切ってしまいました。それからかれを起こして、「サムソン、ペリシテ人がやってくるわ」と叫びました。こんどは、どうなりましたか？20節。

髪の毛を切られたサムソンは、見かけが変わっただけでなく、すべてが変わっていました。神様の力が去ってしまったのです。

それから、恐ろしいことが起こりました。ペリシテ人たちは、サムソンを殺しませんでしたが、その代わりに、彼の目をくりぬいて、動物のように働かせました。ペリシテの人たちがその変わりはてた姿を見て、サムソンとかれの神をあざ笑うことができるようにしたのでした。21節。

牢屋の中で、サムソンは、自分がどれほど愚かであったかを反省することができました。神様を悲しませたことが分かって、かれ自身も悲しくなり、ほんとうに悪かったと思いました。そのあいだ、どんなこと

が起こっていましたか？22節。

ある日、ペリシテ人たちが、偶像の神殿でせいだいなお祝いをすることになりました。3000人もの人々が集まりました。それは、何のお祝いでしたか？ペリシテ人たちは、だれに向かって犠牲をささげていましたか？23節と24節。

かれらは、目の見えないサムソンを牢屋から出して、神殿へ連れて行き、群衆の見世物にしました。しばらくたってから、サムソンは、かれの手を引いていた少年になにかをお願いしました。26節。

それからサムソンは、あるふしぎなお祈りをします。ある特別なことをするための、力を与えてくださいと祈ったのです。それをするために、自分の命を犠牲にしなければいけないことも承知したうえで、あのようなお祈りをしたのでした。

心からごめんなさいを言うなら、神様はいつでもゆるしてくださいますか？そのとおりですね。神様は、目の見えない、かわいそうなサムソンをゆるしてくださいました。神様はどうやって、サムソンの祈りにこたえられましたか？

考えてみよう：自分を喜ばせることは、実はサタンを喜ばせるのだということを、サムソンは最後のさいごで悟りました。私たちも、自分のやりかたをとおしたくなったら、そのことを思い出す必要がありますか？

もっと学ぼう！

★士師記 13-16 章

★人類のあけぼの下巻 54 章

口笛を吹くデイビー――パート 2

エイミー・シェラード

安息日学校の 13 回献金をささげるために、デイビー・バーンズは、お金を稼ぎたいと思いました。ダローさんに、できる仕事がないか尋ねると、彼女はいじわるなことを言いました。悲しくなったデイビーは、逃げていってしまいました。

デイビーとダローさんが話していたとき、親切な花屋の主人がその会話を聞いていたのを、デイビーは知りませんでした。その人には、デイビーの心が傷ついたことがわかりました。かれはデイビーをさがして、「もし君が私の用事を手伝ってくれたら、ユリの花をあげよう」と言いました。

デイビーは、花が大好きでした。花屋さんに言われた仕事を喜んですませ、お花をもらったときのかれには、いつもの笑顔が戻っていました。デイビーは、きれいなユリの花束を大事そうにかかえて、トビーおじさんのみすぼらしい修理小屋にもっていきました。

次の安息日に、教会の先生が、敵を愛し、自分たちを嫌う人たちに親切にすることについて話してくれました。「こんどの安息日までに、」先生がつづけます。「一番いじわるな人に、何かいいことをしてあげてください。イエス様は、そのようなことをする子供でした。そして、君たちがいじわるな人にいいことをしてあげると、イエス様はとても喜んでくださいます。たとえ、13 回献金をささげるお金がなくても、人に親切にするなら、イエス様はそっちのほうをもっと喜んでくださいますよ。」

家に帰る途中、デイビーは、ダローさんに何か親切なことをしてあげる勇気が自分にはあるだろうかと、考えていました。いじわるな人といえば、彼女のことしか思い浮かびませんでした。

かれは、ひとりごとを言いました。「とくべつな献金をささげるお金を稼ぐことはできないかもしれないけれど、親切なことをすると、イエス様はもっと喜んでくださると、先生が言ってたな。よし、ダローさ

んに、ユリの花をあげよう。そうすれば、僕がこじきではないと分かってもらえるだろうし、イエス様も喜んでくださるはずだ。」

その日の午後、つぎはぎだらけの服を着た、そばかす顔の男の子が、ゆりの花束をもって、レンガ造りの大きな家の前に立っていました。お手伝いのフルダさんが出てきて、用件を尋ねました。

デイビーは、「ダローさんにこの花束をさしあげたいんです」と言いました。

お手伝いさんは、とても驚いた顔をして、「ダローさんに、花束をあげるですって？だれからの贈り物なの？」と尋ねました。

「これは、僕からの贈り物です」と、デイビーは答えました。「これを、彼女にさしあげてもいいですか？」

「男の子が嫌いな彼女のために、あなたがお花をあげに来たの？」フルダさんは、びっくりしました。「ダローさんは病気なので、家に入れてくれないと思うわ。でも、男の子が花束をプレゼントしに来ていて、会いたいと言っていると伝えましょう。」

何分かたってから、フルダさんが戻ってきて、デイビーを家の中に入れ、大きな窓のある、広い寝室〔寝るためのへや〕へ案内しました。かれはベッドに近づいていき、「ダローさん、ユリの花をさしあげたくて、もってきました。気に入ってくだされば嬉しいです」と言いました。デイビーは、花束を包んでいた紙をとり、花をダローさんの顔に近づけました。

デイビーを見たダローさんが、「君は、このあいだ私にお金をくれと頼んだ男の子でしょう？」と尋ねました。

デイビーは顔をまっかにして、「いいえ、違います。僕は、お金を稼ぐために、何かできる仕事はないですかと聞いたんです」と、礼儀正しくこたえました。

「ああ、そうだったわね」と、ダローさんが言いました。「じゃあ、あそこの椅子にすわって、どうして私のために、きれいなユリの花束を持ってきてくれたのか、話してちょうだい。しかも、君は貧乏に見えるけれど、どうやってこんなすてきなお花を手に入れたのかしら？」

（つづく）

第5章

忠実なルツ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です」。
ールツ記１：16

日曜日

イエス様がどこでお生まれになったか、覚えていますか？ベツレヘムという町です。今週の物語は、イエス様がお生まれになるずっと前、ベツレヘムに住んでいた家族についてです。何人家族でしたか？また、彼らの名前はなんでしたか？ルツ記１：１－２。

その家族がベツレヘムに住んでいたころ、イスラエルに飢きん〔農作物の収穫が少なく、食べ物が不足すること〕がありました。つまり、食べる物が足りなくなったということです。どうしてですか？それは、雨が降らなくなり、畑の作物が育たなくなったからです。いったいなぜ、雨が降らなくなったのでしょう？それは、神様がイスラエル人を祝福することができなくなったからです。なぜ祝福できなかったのでしょう？幸福になれる神様の規則にしたがう代わりに、邪悪なカナン人のまねをすることにしたからでした。

エリメレクとナオミは、100キロぐらい

離れたモアブの地には、食料がたくさんあると聞きました。モアブ人というのは、アブラハムの甥であったロトの子孫でした。モーセはイスラエルの人たちに、モアブ人とは戦争をしないようにと注意していました。この家族は、飢きんが終わるまで、モアブに住むことにしました。

エリメレクとその家族がモアブに移った後で、何が起こりましたか？3節と4節。

そして、さらに悪いことが起こりました。モアブに移った家族のうち、だれがとり残されましたか？5節。

残ったのは、ナオミと息子たちの嫁〔妻〕の、三人だけでした。彼女たちは、これからどうしようと考えましたか？

考えてみよう：愛する者が死んでしまうと、多くの人は、神様が自分たちを罰しておられるのだと考えます。ナオミも、そのように考えたくなりました。しかし、本当にそうでしょうか？いいえ、ちがいます。実は、サタンがそのように思わせようとしているのです。

月曜日

エリメレクとその家族がモアブに引っ越してから、10年の月日が流れていました。モアブに来たころは、四人家族でした。そのうち残ったのは、ナオミだけでした。

ふたりの嫁たちに対して、ナオミは優しい姑〔夫または妻の母〕でした。息子たちの嫁であるルツとオルパがいっしょにいてくれたことを、彼女はありがたく思っていました。けれども、故郷のベツレヘムのことを思って、ナオミはどんな決心をしましたか？ルツ記1：6－7。

ナオミと二人の嫁たちは、みんなとても仲が良くて、いつまでも一緒にいたいと思っていました。しかし、ルツとオルパにとっては、自分たちの国に帰るほうが幸せになれるだろうと、ナオミは考えるようになりました。できればまた結婚して、幸せな家庭をもってほしいと考えたのでした。ところが、そのことを嫁たちに話すと、彼女たちは何と答えましたか？8節と9節。

彼女たちは、自分たちの国に帰るほうがいいということを、ナオミは説明しようとしました。しかしそれでも、二人はナオミから離れようとしません。結局、どうなりましたか？14節と15節。

オルパはモアブに戻って、ともに育った人たちと暮らすことにしました。しかしルツは、真の神様を信じるようになっていたので、これからは一生、神様とナオミに仕えようと決めていました。彼女がナオミにいった言葉は、聖書の中でもっとも美しい言葉のひとつとして、記されています。16節と17節。

ルツは、なんと誠実で優しい女性だったことでしょう！どうしても考えを変えようとしないルツの気持ちを知って、ナオミは感謝の心でいっぱいになり、これ以上、モアブに帰りなさいと言えなくなりました。18節。

考えてみよう：いちばんいい選びをしたのは、どちらの嫁でしたか？ナオミのことが大好きなルツでしたが、それでも、知らないよその国で暮らす決心をするのは、簡単ではなかったはずです。神様を愛し信頼している人の生涯は、そうでない人の生涯と比べると、どんな違いをもたらしますか？

火曜日

ルツとナオミがモアブからベツレヘムまで歩くには、何日もかかったはずです。とうとう目的地にたどり着くと、その知らせは町中に広まりました。ナオミの昔からのお友だちは、ふたたび彼女に会えて、たいへん喜んだことでしょう。ルツ記1：19。

ナオミに義理の娘だと紹介されたルツを見て、人々は、彼女にとてもいい印象をもったことでしょう。けれどもナオミは、これからのベツレヘムでの生活は、10年前と比べて苦労の多いものになるだろうと考えていました。20節と21節。

飢きんはとっくに終わっていて、畑では作物がすくすくと成長していました。ナオミとルツがベツレヘムにやってきたころ、

人々は何を収穫していましたか？22節。

ルツは、決してなまけ者ではありませんでした。彼女はナオミに、何をしたいと申し出ましたか？ルツ記2：2－3。

昔、神様の律法により、穀物を収穫するとき、束から落ちたものは貧しい人々が拾ってもいいことになっていました。落ち穂拾いと呼ばれる習わしです。

収穫をしている労働者たちのようすを見にきたボアズは、落ち穂拾いをしているルツに目がとまりました。かれは、ルツに話しかけてみました。5節から9節。

ボアズはすでに、ルツのことを聞いていました。ナオミは親戚であったので、ルツにも興味をもっていました。かれは、次になんと言いましたか？11節から17節。

ルツは、一日中けん命に働き、夕方、20キロ近い穀物をたずさえて家に帰ったのでした。早くナオミに、一日の出来事を話したかったはずです。話を聞いたナオミの目は、嬉し涙であふれたことでしょう。20節。

考えてみよう：この時もまだ、ナオミは、神様が自分を愛しているかどうか分かりませんでしたか？何が起ころうとも、私たちは、決して神様の愛をうたがったり、忘れたりすべきではありません。

水曜日

収穫の季節が終わるまで、ルツはけん命に働きつづけました。とりあえず、これで毎日の食べ物の心配はなく

なりました。でもナオミは、食べ物のほかに、気になっていることがありました。まず、ボアズのことが気がかりでした。かれは、ルツに対していつも親切で、とてもすばらしい人であることが分かっていました。しかも、亡くなった夫の親戚だというではありませんか。

また、自分が死んだあとのルツのことを考えると、今のうちに何とかしてあげねばと思うのでした。そのようなときに、神様のある律法を思い出したのでした。息子のいない人が、子供のいないまま死ぬと、その人に近い親戚が、残された妻〔やもめ〕と結婚できるという決まりがありました。

そうすれば、死んだ人の土地は、家族のものとして残されることができました。財産があれば、関係のない人からお金を借りたりしなくてもよくなります。しかも、その土地は、死んだ人の部族のものとして残ることになるわけです。

ナオミは、こういったことを思いめぐらしていました。そしてついに、ある計画が浮かんで、それをルツに話しました。ルツは、賛成しましたか？**ルツ記３：１－５**。

ナオミの計画は、とても変わったものに思われるかもしれませんが、当時としては、名案〔よい考え〕と言えるほどのものでした。それは、ルツの行動によって、家族の土地を守るために、彼女がボアズと結婚する気があることを、かれに分からせるための計画でした。ナオミには孫がいなかったので、家族の土地は、いずれほかの人の手にわたってしまうことが、はっきりしていました。

考えてみよう：助けの手をさしのべることによって、持っているものが失われないようにする、または失われたものを取り戻すようにすることを、「贖い」といいました。ボアズは、ルツとナオミのために、その贖いをしたいと考えるようになるでしょうか？それは、次回のお楽しみです。

木曜日

ナオミを信頼していたルツは、言われたとおりに行動しました。体を洗い、いちばんいい服を着て、ボアズが働いていた脱穀場へ行きました。そこでは、男たちが、大麦の実と殻を分ける作業をしていました。一日の仕事を終え、夕食をとってから、ボアズはそこで夜を過ごすことにしていました。

ルツは、だれにも見られないようにやってきて、ひそかにボアズが寝ている場所を見つけました。かれが眠っているのを

確かめてから、ルツは何をしましたか？ルツ記３：７。

一日中きつい仕事をしたボアズは、ぐっすり眠っていたことでしょう。しかし夜中にとつぜん、だれかが自分の足のところで寝ているのに気づきました。８節と９節。

ルツが言ったことの意味を、ボアズはすぐに理解しました。そして、これはすべて、ナオミがしくんだ計画にちがいないと思ったのでした。答えを出すために、かれは長いあいだ考えましたか？10節と11節。

もしかしたら、ボアズはすでに、ルツとの結婚を考えていたかもしれません。しかし、自分よりも、もっとナオミの家族に近い親戚がいることを、かれは知っていました。つまり、その親戚が、ルツとの結婚を最初にえらぶ権利があったのでした。12節と13節。

つぎの朝、日が昇る前に、ナオミのためのおみやげをもたせて、ボアズはルツを家にかえしました。

きっとナオミは、何が起こったかを詳しく聞きたかったことでしょう。ルツの話を聞いたあとで、彼女はなんと言いましたか？18節。

考えてみよう：ナオミは、ルツにとって、本当の母親のようでした。ルツは大人でしたが、ナオミの言いつけには、なんでも喜んでしたがいました。彼女は、どのような律法にしたがっていましたか？

金曜日

その日、ボアズは、ナオミが思っていたとおりに行動しましたか？ルツ記４：１－２。ボアズがもうひとりの親戚に、贖うべき土地について相談すると、すぐにその人は、自分がその土地を贖うといいました。しかし、それをするなら、ルツと結婚し、贖った土地は彼女の息子たちにゆずらなくてはいけないことを、その親戚の人は知りませんでした。そのことをボアズが話すと、その人はなんと言いましたか？６節。

するとボアズは、ある変わった儀式を行いました。それは、重要〔ひじょうに大切〕な書類にサインをしたり、はんこを押したりするようなものでした。７節から９節。

そのようすを見ていた長老たちも、ほかの人々も、その土地がボアズのものとなることを認めました。また、かれがルツと結婚する約束をしたことも、彼らは認めた

のでした。10節から12節。

ルツに最初の赤ん坊が生まれたとき、その子はオベデと名づけられました。ベツレヘムの女たちは、親しい友人であるナオミといっしょに喜んでくれました。彼女たちは、なんと言いましたか？またナオミは、何をしましたか？14節から16節。

いつの日か、オベデが、あの偉大なダビデ王の祖父〔おじいさん〕になるとは、だれも知りませんでした。さらにかれは、世界でもっとも重要なお方の祖先ともなるのでした。千年以上ものちに、そのお方は、ボアズがルツを贖った、あのベツレヘムの町でお生まれになりました。そのお方とは、どなたのことでしょう？そうです、イエス様のことです！イエス様は、サタンの奴隷であった私たちを買い戻された贖い主、救い主であられます。そして最後に、かれは私たちの世界を新しくつくられてから、それを永遠に私たちのものとして与えてくださるのです。

考えてみよう： *恐るべき永遠の死を味わうことによって、すでにイエス様は、私たちをサタンから買い戻して〔贖って〕くださいました。そしてまもなく、私たちを迎えに来られ、永遠の故郷にともに住まわせてくださいます。最後に、イエス様が私たちの世界を新しく、そして美しくつくられるのを、私たちは見ることでしょう。そこで私たちは、永遠にかれとともに暮らすのです！私たち一人ひとりが、贖われてイエス様のものとなることを、選ぶことができます。そのことを、心から喜んでいますか？私たちは、イエス様によってサタンから贖われたことを、決して忘れないでください。*

もっと学ぼう！

★ルツ記1-4章

★キリストの実物教訓 p. 268-280

口笛を吹くデイビー―パート3

エイミー・シェラード

デイビーは、いじわるなダローさんに、かれのユリの花をあげることにしました。敵にも親切にしなさいと言われる、イエス様の言葉にしたがいたいと思ったからでした。

ダローさんは、デイビーがどうやってユリの花を手に入れたのか、また、なぜそれを彼女にあげようと思ったのか、かれが話すのを待っていました。

デイビーは言いました。「花屋さんのお手伝いをしたので、そこの人からもらったんです」と。

「あら、そうだったの。ではなぜ、その花を私にくれるの?」と、ダローさんが尋ねました。

デイビーの顔が、ますます赤くなりました。

「ほら、どうしたの?本当のことを話しなさい。」ダローさんは、しつこく尋ねます。

デイビーはこわくなりましたが、本当のことを話すことにしました。「イエス様のためにやったんです」と、かれは言いました。そして、「安息日学校の先生が、一番いじわるな人に、親切にしてあげなさいと教えてくれたんです。ダローさんのことは、嫌いじゃないですけどね」とつけ加えました。

しばらくのあいだ、ダローさんはただ、デイビーをあきれたように見つめていました。それからいきなり、大声で笑いだしたのです。その声を聞いたフルダが、びっくりして、「いったい何があったのかしら?ダローさんがあんなに笑ったのは、初めてだわ」とつぶやいたほどでした。

ようやく笑いがおさまってから、ダローさんは、もっと近くに来て詳しい話をするようにと、デイビーに言いました。彼女の声はとても優しくなっていたので、デイビーは安心して話し始めました。13回献金についてデイビーが説明すると、かれがお金を必要としていた訳を、彼女は理解しました。

「それじゃあ、デイビー・・・」ダローさんは言いました。「あなたが私にお花をくれたので、私は、あなたが献金するために5ドル差し上げましょう。」

デイビーはお礼を言ってから、「でもそれでは、僕が稼いだお金ではないので、僕が献金したことにはなりません」と答えました。

ダローさんがベルを鳴らすと、フルダがやってきました。「この少年に、何かお仕事をさせてあげ

てちょうだい。放課後にアルバイトをして、お金を稼ぎたいんですって。」ダローさんは、フルダに言いました。

フルダは、自分の手伝いをしてくれる人ができて、とても喜んでいました。こうしてデイビーは、献金のためのお金を稼ぐことができるようになりました。ダローさんのために働いていると言っても、だれも信じてはくれませんでした。しかも、彼女が男の子を雇ったとは、だれも信じることができませんでした。

トビーおじさんが病気になって、デイビーが数日だけ仕事を休まなくてはいけなくなったとき、ダローさんはとても寂しく感じました。デイビーの明るい口笛と、かれの笑顔が恋しくなったのでした。

デイビーがふたたびフルダの手伝いをするようになると、ダローさんはかれを自分の部屋に呼びました。それから嬉しそうに、かれを抱きしめて、「あなたって、本当にいい子ね!」と言ったのでした。その時デイビーは、お母さんが亡くなって〔死んで〕以来、初めて涙を流しました。それはもちろん、嬉し涙でした。

ダローさんは、デイビーをぎゅっと抱きしめてから、かれにアルバイトのお金を渡しました。そして、「このアルバイト代のほかに、あなたに渡したいものがあるの。さあ、これは私からの13回献金よ。あなたのと一緒に、これをささげてちょうだい」と

言いながら、かれに封筒を手渡しました。封筒の中には、100ドルのお金と、安息日学校の先生に宛てた手紙が入っていました。デイビーは彼女に、「ああ、ダローさん、あなたは天使のようなかたです」と言いました。

まもなく町の人たちも、ダローさんが全く別人のように変わってしまったことに気づきました。彼女に親切にしようと決めた、勇敢な男の子をとおして、イエス様がダローさんを変えてくださいました。デイビーの勇気ある行動によって、ダローさんも、イエス様を愛する人になっていたのでした。

（おわり）

第6章

聞かれたハンナの祈り

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「幼子でさえも、その行いによって自らを示し、そのすることの清いか正しいかを現す。」箴言 20:11

日曜日

たとえどんなことが起ころうとも、生きているかぎりずっとイエス様を愛し、信頼し、イエス様にしたがうことを選ぶ、そんなことが小さな子供にできるのでしょうか。ええ、できますとも。聖書は、まだ幼かった時に神様にしたがったある少年について語っています。その少年の名は、サムエルといいます。

サムエルのお父さんはエルカナという人で、お金持ちでえらいレビびとでした。レビびとは、幕屋で神様のための特別な仕事をしていました。大祭司と、聖所で大祭司のお手伝いをする人は、みなレビびとでした。

エルカナとその家族は、ラマというところに住んでいました。そこは昔から幕屋のある、シロの地から20キロも離れたところです。

サムエルのお母さんはハンナといい、神様を心から愛するすばらしい女性でした。

毎年、エルカナは家族をつれてシロへ行き、そこで何日かかけて、ある特別な集会をしました。彼らはいつも、神様への犠牲の動物をたずさえて行きました。そして犠牲の供え物をささげた後には、ある特別な食事をするのです。それは家族みんなにとって、楽しいひとときとなるはずでした。

ところが、ハンナはいつも楽しいどころか、とても悲しんでいたのです。来る年もくる年も、エルカナは家族をつれてシロへ集会に行きます。そして来る年もくる年も、いつだってハンナは悲しいのです。実際、集会に行くたび

に、ほとんどの場合、悲しみのあまり食べ物がのどを通らないほどでした。

ある時のこと、特別な食事の後、ハンナはひとりで幕屋へ行きました。そして、胸も張りさけんばかりに泣いていました。なぜでしょうか？何が悪かったのでしょう？それを明日調べてみましょう。

考えてみよう：あなたは今までに、どうしてもあるものが欲しくて泣いたことはありますか？時々子供たちは、あまり大事ではない物を欲しがって泣くことがありますね。でも、ハンナが泣いて求めていたのは、とてもとても大事で、それは神様だけが与えることのできるものだったのです。

月曜日

ハンナがなぜ泣いていたのかわかりますか？理由は、彼女とエルカナの間に子供がいなかったからです。ふたりは、いつかエルカナが亡くなった後に、土地や財産の面倒を見る息子が欲しいと願っていました。

エルカナは神様を愛し礼拝し、そしてハンナのことも心から愛していました。しかし子供ができないので、息子を与えてくださる神様に信頼せずに、他の女の人と結婚してしまいました。ペニンナという名の女性です。そういうわけで、当然ながら、やきもちをやく嫉妬の心が生まれました。

Darrel Tank

ペニンナは自分に子供が生まれると、神様がハンナよりも自分を大事にしていることを示してくださっているのだ、と思うようになりました。しかし、ペニンナはハンナに嫉妬もしていました。というのは、エルカナが自分よりもハンナを愛しているのを知っていたからです。ペニンナは意地悪になり、ハンナの心を傷つけるためには、どんなことでもするようになりました。

ところで、毎年エルカナが家族をどこへつれて行ったか覚えていますか？彼らはそこで何をしたでしょうか？**サムエル記上 1:3**。

供え物をささげた後の特別な食事の席で、エルカナは、家族の一人ひとりに、神様への特別な犠牲の供え物をとり分けました。**4-5 節**。

エルカナが、ハンナには大きめに与えたとき、おそらくペニンナはますます嫉妬したことでしょう。彼女はハンナに対して、どんな行動に出ましたか？**6-7 節**。

ハンナはいつも落ち着いて、忍耐していました。しかし今度ばかりは、たとえエルカナがハンナを慰めるため最善をつくしたとしても、もう耐えられないと思いました。**8 節**。ハンナはエルカナに不満をもらしませんでしたが、特別な食事の後、彼女は何をしました

か？9節と10節。

考えてみよう：神様がご計画なさったように、ひとりの妻ではなくて、妻がふたりいたために不幸せだった家族は、ほかにもありましたか？アブラハムの家庭でのサラとハガルはどうでしょう？ヤコブの家庭でのラケルとレアはどうでしたか？

火曜日

ハンナは食事をすることができませんでした。特別な食事の後、彼女は、自分が悲しんでいることについて神様とお話をするために幕屋へ行きました。入口の近くでひざまずき、すすり泣きながら彼女がうったえたことは何だったのでしょう。サムエル記上 1:9-11。

大祭司であるエリは、入口のそばに腰かけてハンナを見ていました。彼は、ハンナのように祈る人をこれまでに一度も見たことがありませんでした。ほとんどの人が、神様を敬ってさえいなかったからです。時々ですが、女性ですら酒に酔って幕屋をおとずれることがありました。ですから見ているうちに、エリは、ハンナがひどく酒に酔っているにちがいない、と確信しました。

かわいそうなハンナ！誤解されてどんなに悲しかったことでしょう。彼女はただちに、しかしおだやかに、自分が酒に酔っているのではないことを話しました。12-14節。

まもなくエリは、ハンナに言ってしまったことを深く反省しました。悪いことをしていない人を傷つけるつもりはなかったからです。ハンナは神様と何を話したかについて、まだエリに話していませんでしたが、彼女が善良な女性で、神様を心から愛していることが、エリにはよくわかりました。彼はなんと言いましたか？17節。

ハンナの心の内にあった重苦しい気持ちは、たちまちどこかへ消えてしまいました。そして、テントへ戻ったころには、神様が自分の祈りを聞いてくださったことを確信できたのです。食欲もでてきました。18節。

翌朝、家族一行はラマの自宅へ帰りました。ハンナがうれしそうなのを見て、エルカナが喜んだことは、みなさんにも想像できますよね。ペニンナとその子供たちは、こんなにまでうれしそうにしているハンナに一体何が起きたのか、ふしぎでたまらなかったに違いありません。

考えてみよう：ペニンナのさまざまないじわるについて、ハンナは不平を言ったり怒ったりしましたか？ハンナは自分の問題を、だれにもって行きましたか？私たちも自分が失望したとき、ハンナのように、いつでもイエス様のところへ行くことができます。

水曜日

神様は、ハンナの祈りを聞いてくださいました。そして彼女が願ったとおり、息子をお授けになったのです。サムエル記上 1:20。

ハンナが交わした約束を覚えています

か?神様が息子を下さったら、どうすると約束したでしょうか?もういちど読んでみましょう。サムエル記上 1:11。

小さなサムエルは、ナジルびととして生きることになりました。ナジルびととは、ひじょうに特別な方法で神様にささげられた人のことです。サムソンもナジルびとでしたが、神様を何度もがっかりさせました。さてサムエルは、どのような生き方を選ぶのでしょうか。

サムエルがまだ話すこともできないうちから、ハンナはサムエルに、神様を愛し、神様にしたがうことを教え始めました。思いつくかぎり、すべてのことにおいて、神様の幸福のルールを理解させるよう努めました。ハンナはサムエルに、神様が創造された美しいものを見せました。またどのようにお祈りするかを教え、神様がサムエルを守ってくださることを感謝しました。

サムエルが物心がつくと、ハンナはお手伝いをすることを教えました。おそらく、落ちているゴミを拾ったり、おもちゃを片付けたり、小さな物をお母さんのところへ運んだり、といったようなことだったでしょう。

またハンナはサムエルに、「いけない」の意味を教え、いつでもしたがうことを選ぶよう、やさしく教えてあげました。そのおかげで彼は、したがった時に人がより幸福になれることをすぐに学んだのでした。

そして聖霊は、イスラエルの民のために必要な大きな働きをする人物になれるように、サムエルを育てるハンナをお導きになりました。当時ほとんどの人は、幸福のルールにしたがうことなく、とてもいい加減な生き方をしていました。そのため、神様は彼らを祝福したくてもできませんでした。

***考えてみよう:** 服従できるようになった犬を見たことがありますか?人間の赤ちゃんは、おすわりできる頃までに、とても賢い犬よりもずっとたくさんのことを理解できるのを知っていましたか?賢い両親は、ハンナがサムエルにしたように子供に教えるのですよ!自分の子供がまだ小さな赤ん坊の時から、もう教え始めているのです。*

木曜日

サムエルが生まれてまもなく、シロでの特別な集会をする時がやってきましたが、ハンナはどのような決心をしたでしょうか?サムエル記上 1:21-23。

ハンナが誓ったあの神聖な約束のことを、エルカナもハンナも忘れてはいませんでした。ふたりとも、神様がサムエルを彼らに与えてくださったことを知っていました。またハンナは、サムエルを注意深くしつけました。それは、もうすぐサムエルを特別な捧げものとして神様にお返しするということを覚えていたからでした。ふたりはサムエルをシロへつれて行き、彼はそこで、大祭司エリと一緒に暮らすことになるのです。

サムエルが自分の身の周りのことを十分できるようになったとき、ハンナは約束をはたす時がきたのだと悟りました。サムエルはエリのもとで生活し、聖所でのお手伝いの仕方をエリから教えてもらうのです。ハンナはサムエルのため特別に、子供用の礼服を作ってあげました。祭司らが着るような特別な礼服です。心を込めてその服を縫いながら、ハンナは、どうかこの幼い息子、かけがえのない我が子をお守りくださいと、神様に祈りました。

ハンナはきっと、エリの家庭のことを心配していたことでしょう。エリが親切な人であることは、イスラエルの人々によく知られていました。しかし、彼は自分の息子たちを、神様の幸福のルールにしたがうように教育しませんでした。そのため息子たちは、とても悪い人になってしまっていたのです。このような息子たち、ホフニとピネハスは、自分たちと同じように、サムエルをも神様に背かせようとそそのかすでしょうか?サムエルはまだ幼いのです。はたしてハンナの教えを覚えているでしょうか?彼は正しい選びができるでしょうか?ああ、どうかサムエルがそうできますように、とハンナは祈ったにちがいありません。

考えてみよう:ハンナが約束をはたすためには、もっと神様に信頼する必要がありましたか?小さいサムエルは、自分が神様への特別な捧げものであることを、すでにわかっていたと思いますか?あなたの両親も、あなたにサムエルのようになってほしいと望んでいることを知っていましたか?

金曜日

とうとう、エルカナとハンナがサムエルをシロへつれて行く日がやってきました。サムエル記上 1:24,25。

ハンナが以前、幕屋に行った時からもう数年がたっていましたので、エリが自分のことを覚えていないだろうことはわかっていました。彼女はエリに何と言いましたか? 26-28 節。

エリにとって、ハンナのように自分の思いを後まわしにしたこの行動は信じがたいものでした。かれ自身賢い父親ではなく、ふたりの息子をきちんと教育できていませんでした。ハンナのすばらしい祈り（サムエル記上 2：1-10）を聞いた今、エリはへりくだり、敬けんな思いに満たされました。彼は、いとしい幼いサムエルには、自分が息子たちにした失敗を繰り返すことのないよう最善の努力をしていくことでしょう。

別れの時はすぐにやってきました。もしかするとサムエルは少し泣いてしまったかもしれませんが、幕屋でのエリの仕事を手伝うことを心から楽しみにするように母親に教えられているので、心配ありません。すでにエリの方も、このかわいらしい少年のことを大好きになっていました。

ハンナの目にも涙が浮かんでいたのではないでしょうか。それでも心には喜びがありました。なぜなら彼女は、神様への約束をはたしているのですから。ハンナは神様が必ず、自分がささげるいとしい我が子のことを守り導いてくださると信じていました。おそらくサムエルと両親は、抱き合ってキスをして、それから手をふってお別れをしたのでしょう。

***考えてみよう：**サムエルは、３歳から５歳ぐらいだったと思いますが、あまりにも小さすぎると思いませんか？でも赤ちゃんでさえ、わがままをしてかんしゃくを起こしたり叫んだりすることがありますよね。生まれた時からサムエルをきちんとしつけることができるようにハンナを助けたのは、神様でした。ですからサムエルは喜んで従うときに、より幸せになれることをすでに学んでいたのです。服従は他の人も幸福にします。なにより、それはイエス様を喜ばせることです！あなたもそのことを学んでいますか？*

もっと学ぼう！

★サムエル記上 1 章、2 章 1-11 節、18-21 節、

★人類のあけぼの下巻 55 章

焼かれた聖書

エイミー・シェラード

ずっと何年も昔、ある遠い国でのこと。この国の皇帝〔王様〕がある法律(きまり)をつくりました。それは、聖書を持っている人、またはただ聖書を読むだけであっても、そのようなことをした人には、だれでも罰を与えるという法律です。この国の人々は、聖書を理解できるのは司祭だけで、その他の平民たちは聖書を読むべきではない、とさえ思っていました。サタンは、人々に十戒（神様によって作られたきまり）を学んでほしくない、また神様を愛して神様にしたがってほしくありませんでした。

人々は皇帝の法律はまちがっていると知っていましたので、自分の聖書を守っていました。そこで、人々の家へ行き、調べて、聖書を見つけたなら取り上げるように、兵隊がつかわされました。人々の方ももちろん、兵隊が来ると知ったら、すばやく自分の聖書を安全な場所へ隠しました。ときには少年少女たちが、兵隊が来たことを村人に知らせる役目をうけました。そうすることで、知らせを受けた村の人々は聖書を隠すことができたのです。

そんなある日、少女がひとりで留守番をしているところへ、友人がきてドアをあけ、小さな声でこういいました。「兵隊がやってくるわ！はやく聖書を隠して！急いで！」

少女はちょうどパンをこねているところでした。兵隊はもう家のそばまで来ているので、聖書を隠す時間はありません。すぐさま少女は祈りました。すると、何をするべきか思いついたのです。少女はこねていたパン生地をすばやく広げ、真ん中に聖書を入れました。そして生地で包みこみ、急いで型に入れ、焼き釜（オーブン）に入れました。

まもなく兵隊がドアをたたき、怒鳴りました。「皇帝様の名によって命じる、ドアをあけろ！」

少女は礼儀正しく彼らを家に迎え入れ、兵士たちは家中を注意深く調べ始めました。食器だなや引き出し、すべてのたな、また家具の下、枕とベッドの下を調べました。兵士たちは焼き釜（オーブン）のドアを開け、中をのぞきこみました。しかし、そこには大きなひとかたまりのパンがふくらんで、もうすぐ焼き上がるのが見えるだけです。

とうとう、兵士たちはあ

きらめて次の家へ向かいました。聖書は守られたのです。

それから何年もたって、この少女の孫にあたる男性がアメリカへわたりました。彼はあの大切な聖書をもって行きました。そして時々それを見せては、自分のおばあさんがどうやってこの聖書を兵隊から守ったのかを語り、今人々が自分の聖書をもつことのできる国に住んでいることがどんなに恵まれたことかを思い出させました。

あなたならどうしますか?もし警察があなたの家に来て、もっている聖書をすべて出しなさいと言ったらどうしますか?あの少女のように聖書を大切にしているでしょうか?もしイエス様にしたがったために、刑務所に入れられたとしたらどうでしょう?聖書をもっていなくても、暗唱した聖句や、聖書にあるいくつものすばらしい約束を思い出すことができるでしょうか?

第7章
神様の声を聞くサムエル

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。」エレミヤ 1:7

日曜日

お父さんとお母さんがサムエルをシロにひとりおいて帰ってしまった日から、幼いサムエルにとっては、すべてが変わってしまったことでしょう。これからは大祭司のエリとくらすのです。エリはサムエルのことを、まるで我が子のようにかわいがってくれました。サムエルはいつも明るくて、いつでも従順〔すなおでよく聞きしたがうこと〕でした。でも、こんなに小さい子供に、仕事のお手伝いが本当にできるというのでしょうか？もちろんできますとも！子供たちは皆、歩けるようになるとすぐにお手伝いをはじめます。自分にできることはたくさんあるな、とサムエルはすぐに気づきました。おそらくエリは、サムエルに犠牲の供え物（動物）を焼いたあとの灰を運ぶようにたのんだことでしょう。それは汚くて、やりにくい仕事だったことでしょう。それでもサムエルは、すべての仕事を明るく元気にこなしました。

また、彼は祭壇と洗盤（手を洗い清める水を入れる物）をピカピカにみがいたり、お水を運んだり、小さなほうきで聖所の周りのお庭をそうじしたり、お使いなどもしたことでしょう。聖所には、彼のできることがたくさんあったのです。そして成長するにつれ、できることはさらに増えていきました。

エリの息子たちも祭司で、エリの大切

な助手でした。しかし、サムエルが成長していく一方で、彼ら自身はどのような選びをしましたか？サムエル記上 2:12。

『よこしま』とは、正しくない、という意味です。悲しいですね！サムエルは、つい彼らの真似をしてみたくなったでしょうか？いいえ。彼は幼くても、何が正しくて何が悪いことかをすでによくわかっていました。それに、たとえ他のだれかが何をしようとも、自分は生きているかぎり神様を愛し信頼し、神様にしたがうとすでに決心していました。

考えてみよう：あなたもサムエルのような選びができたことはありますか？今、何かの役に立てるようなことをしていますか？今よりももっと役に立つためには、どうしたらよいでしょうか？

月曜日

神様は、大祭司は神の民イスラエルの指導者であるべきだ、とおっしゃいました。大祭司は、どのように神様を愛し敬うかのよい模範（お手本）となり、人々にもそう教えるべきでした。もし彼らがそのようにしたならば、神様はイスラエルの民を祝福し、大いなる国民にすることができたはずです。

エリは神様を尊敬し、神様にしたがうことがとても大事なことだとは知っていました。しかし、息子たちにそれを教えていませんでした。子供が両親に無礼（尊敬しない）でしたがわないとしたら、神様に対しても同じような態度をとります。

エリのふたりの息子、ホフニとピネハスは「したがう」ことを教えられませんでした。息子たちがしたがわなくても、エリは注意せず、その場をやりすごしました。正しくないとわかっていることでさえ、息子たちがやりたいと言えばそれに負けてしまっていたのです。そしてエリは自分が嫌われたくないがために、息子たちに罰を与えるべき時にそうしませんでした。なんとおろかで悲しいことでしょうか！

今やホフニとピネハスはひじょうに悪い罪深い祭司で、みんなもそれをわかっていました。エリが、彼らのしていることはいけないことだと注意すると、小さい頃からしてきたように、それを無視しました。その一方で、サムエルは何をしていたでしょうか。サムエル記上 2:18。

考えてみよう：あなたがどうしても欲しい物があっておねだりをしたとき、お父さん

お母さんがおれてくれたらなぁ、と願ったことはありませんか？また、あなたが何か悪いことをしたときに、両親が叱らないでみのがしてくれたらいいのになぁ、と思ったことはありませんか？けれども、お父さんとお母さんはあなたをとても愛しているので、甘やかすようなことはできないのです。それに、あなたも心の奥底では、両親が自分のあやまちをみすごすことなく、甘やかさなくてよかったと思っていますよね？

火曜日

イスラエルの民にとって、正しいことを選ぶのは簡単ではありませんでした。それなのに、彼らの指導者たちが神様のおきてに従っていないとなれば、それをまねて神様に従わなくなるのは当然です。こうして、エリの息子たちの悪事のために、多くの人がますます不幸になってきていました。

人々も祭司たちも、幕屋に持って来られる動物の犠牲の扱いについての神様のおきてを知ってはいました。まずは、脂肪のすべてが祭壇で焼かれなくてはなりません。それから、肉のある部分はゆでて祭司たちにあげます。しかし肉のほとんどは、犠牲をささげた後の特別な食事のために、人々に返すことになっていました。

ホフニとピネハスは、これらのおきてにしたがっていませんでした。人々が犠牲の供え物の肉をゆでていると、時々祭司のしもべたちが大きな肉刺しで、ゆでている肉を刺して持って行ってしまうのです。また時には、肉の脂肪の部分を祭壇で焼く前に、生の肉をもらいにきました。そうすれば、肉をゆでずに焼いて食べることができるからです。しもべたちは、必要ならば力ずくでそれらを奪っていきました。**サムエル記上 2:13-17。**

ホフニとピネハスがあまりにもひどいので、イスラエルの民は、もうシロでは礼拝や犠牲をささげたくなくなってしまいました。

サムエルの両親はどうしたでしょうか？彼らは毎年シロに通いつづけましたか？（**18 節と 19 節**）

エルカナとハンナは、他の人々がそうでないときでも、神様に忠実であることを選びました。

***考えてみよう：**ホフニとピネハスが幼かった頃に、エリはただ言ってきかせる以上のことをするべきだったのでしょうか？親たちは、子供が言うことを聞かないときには、話してきかせる以上のことをする必要がありますか？指導者ですらまちがったことをするときには、それを理由に神様に従わなくてもよいでしょうか。*

水曜日

サムエルは、じょじょに成長していきました。ですから、毎年ハンナが彼のために作る礼服は、前の年のものよりも少し大きめでなければなりません。サムエルがエリの息子たちにならわずに正しいことを選んでいるのを知ったハンナは、どんなに嬉しかったことでしょう。

もうひとつ、ハンナを喜ばせたことがありました。サムエルの両親がシロへ来たとき、エリは彼らに何を話しましたか？サムエル記上 2:20-21。

サムエルが毎年新しい弟、妹たちに会うのにどれだけわくわくしたか、みなさんもわかるでしょう！

エリは、心からサムエルを愛していました。彼はサムエルに、モーセの書物から教えたことでしょう。創世記から申命記までの書物です。そしてきっと、ヨシュアと士師〔さばきづかさ〕たちについても話したことでしょう。おそらくギデオンの物語も、サムエルのお気に入りの話だったと思いませんか？

サムエルは、神様がイスラエルの民にお与えになった律法（きまり）の他にも、人々が神様にしたがったらどうなるか、また、したがわなかったらどうなってしまうのかということも学びました。そして今、エリの悪い息子たちのせいで、イスラエルの民はますます神様に反抗しています。

でも、イスラエルのじょうたいがどんどん悪くなっていく中で、神様を愛し神様にしたがう人が何人かいました。

エリは息子たちがどんな悪さをしているか知っていましたので、もういちど息子たちと話し合いました。彼は息子たちがしていることが、神様に対する罪であることを思い出させました。そして、もし彼らが悔い改めて変わらなければ、神様はその罪をゆるすことはできないのだ、と忠告しました。この話し合いは彼らを変えたでしょうか？サムエル記上 2:23-25。

考えてみよう：エリは息子たちに、祭司という重要な仕事をつづけさせるべきでしたか？エリが喜ばせたかったのは息子たちですか、それとも神様ですか？エリは、だれを喜ばせるべきでしたか？

木曜日

ある日、神様は特別な使者をエリにつかわしました。使者は、神様がエリの息子たちがしてきたことをどう考えておられるかを、はっきりとエリに告げました。息子たちが神様の民におよぼした影響があまりにも大きかったので、神様はもうこれ以上、民を祝福することがおできにならないのでした。それで使者は、これからエリの息子たちの身にどのようなことが起こると言いましたか？サムエル記上 2:34。

エリ自身、人々にとってよい模範（お手本）ではありませんでした。自分の息子たちに服従を教えきれなかったからです。もう今ではだいぶ歳をとり、目もほとんど見えなくなってしまいました。彼は、神様がサムエルを特別な指導者になるために訓練しておられることはよくわかっていましたが、サムエルをねたむことはしませんでした。エリは今でもサムエルを我が子のように愛していました。また、エリは大人になった自分の息子たちにしたような同じあやまちを、サムエルにはしていませんでした。

ただ、エリはまだ息子たちの悪い行いをとめておらず、たとえ彼らとまた話し

合ったとしても、それは無駄におわるでしょう。そこで、忍耐強い愛の神様は、もういちどだけエリに警告を与えることにしました。そしてその警告を、まだ小さな子供であるサムエルをとおして与えることにしました。

幼い頃からこれまでずっと、サムエルは神様を愛し、神様に信頼してしたがう選びをしてきました。しかし神様は、まだ声をだして彼に語りかけたことはありませんでした。

考えてみよう：イエス様は、私たちが他の人々を助ければ、イエス様を助けたのと同じだと言っておられるのを知っていましたか？いつになったら私たちは、人を助ける働きができるようになりますか？それは、大人になってからでないとできないのでしょうか。それとも、私たちがまだまだ若くてもできることでしょうか。

金曜日

それは夜に起こりました。聖所はもう閉められており、エリとサムエルはもう眠りについていました。サムエル記上 3:2-3。

とつぜん、だれかが自分の名前を呼ぶのをサムエルは聞きました。彼はベッドから飛び起きました。きっとエリが呼んだにちがいありません。「はい、わたくしはここにおります！」そう言いながら、サムエルは元気にエリのもとへ走って行きました。エリはあまり目が見えませんでしたので、サムエルはおそらくエリにさわったことでしょう。「わたくしはここにおります、お呼びですか？」エリは、サムエルが夢をみたのだろうと思いました。２度目にサムエルが自分のところに来たとき、エリはなんと言いましたか？ 5-6 節。

そして、３度目にふたたび自分の名前が呼ばれるのを聞いたとき、どうしてエリはこんなことをするのだろうか、とふしぎに思ったことでしょう。しかしエリはこの時、神様がサムエルに話しかけておられるのだと確信しました。 8- 9 節。

サムエルはふたたび眠りについたと思いますか？本当に、偉大なすべての造り主であられる神様が、自分をお呼びになったのだろうか？次にサムエルが答えたとき、彼の声は小さく震えていたことでしょう。 10 節。

それから神様は、エリとエリの家族にこれから起ころうとする悲しい出来事を、サ

ムエルにお告げになりました。神様がサムエルに語られたときには、まるで大人の預言者に対するように語られました。神様と話しおえた後、サムエルはふたたび眠りにつくことができたと思いますか？ 15節。次の日の朝、サムエルはいろいろな用事を片付けながら、神様が自分に何を語ったかをエリがたずねませんように、と願っていたでしょう。サムエルはエリのことが大好きでしたので、彼を悲しませたくありませんでした。でもすぐに、サムエルは呼ばれているのに気づきました。今度こそ、呼んでいるのはエリです。サムエルは、神様がおっしゃった事をつつみかくさずエリに話しましたが、エリはサムエルに対してねたんだり、怒ったりしませんでした。エリは何と言いましたか？ 16-18節。

***考えてみよう：**エリは人々に対してよい模範ではありませんでした。大きな問題のひとつは、エリは息子たちが幼い頃から、したがうように強く言い聞かせてこなかったことです。エリが聖所での息子たちの仕事を取りあげるには、もう遅すぎたでしょうか？いいえ。彼は息子たちの仕事をとりあげましたか？エリが正しい事をするための力を、神様は与えることがおできになったでしょうか？もちろんです。では、私たちが正しい事を選ぶときには、正しい事を行えるようイエス様は力を下さいますか？イエス様が私たちにその力を与えることがおできになると聞いてうれしいですか？いつも私たちにその力を下さるように、今すぐ求めようではありませんか。*

もっと学ぼう！

★サムエル記上３章
★人類のあけぼの 56 章

男子アルバイト生募集—パート1

エイミー・シェラード

ピータースさんはお金持ちで、変わり者。少なくともみんなはピータースさんのことをそう話しているんです。自分の会社を経営していて、小間使いをしてくれる少年をやといたいと書かれた看板を、お店の窓にずーっとつるしています。

「そんなのめちゃくちゃ簡単だろ。」ジョニー・シモンズは友だちに言いました。「僕がその仕事をもらって、いくらかお金を稼ぐさ。」そして思ったとおり、ピータースさんは試しにやとってくれると言ってくれました。次の日、ジョニーはピータースさんのところで、小間使いとして働きました。

午後3時頃になって、ピータースさんはジョニーに、屋根裏へ上がってそこにある長くて深い箱の中身を整理してほしい、とたのみました。「箱は部屋の真ん中にあるからね」とピータースさんは言いました。「行けばわかるよ。」

屋根裏は暗くてひんやりしていて、薄汚いところでした。おまけにクモの巣だらけで、ねずみが隠れるのにはかっこうの場所です。ジョニーは箱を見つけ、中をのぞきました。クギやゴミ、ネジ、ボルト、壊れたように見える物など、ジョニーにとってはガラクタのようなものばかりです。こんなことをするためにやとわれたんじゃない、そう自分に言い聞かせて、ジョニーは下へおりていきました。30分後、ピータースさんがやってきて「箱の中身を整理してくれたかね?」とジョニーにたずねました。「箱には何も整理するようなものはありませんでした」とジョニーは言いました。「だって、さびたクギとかガラクタばっかりですよ。」

「そりゃそうだ。」ピータースさんはうなずきました。「そのクギとかガラクタに見えるものを整頓してほしかったんだけどね。で、君はやってくれたのかい?」

「いいえ、ピータースさん。」ジョニーはしぶしぶ認めました。「屋根裏は暗くって、きれいに整頓した方がいいものなんてなかったんですよ。それに、ピータースさんが僕にしてほしいことって、お使いに行くだけだと思っていたんです。」

「ほほう!」ピータースさんは言いました。「私にたのまれた事をするために、君は来てくれたのだと、私は思ってい

たのだがね。」そういいながらも、ピータースさんは愉快そうにほほえんで、ジョニーに町へお使いに行くようにたのみました。

６時になって、ピータースさんはジョニーを呼んで、その日の分の給料を払いました。それからジョニーにお礼を言って、もう来なくてもよいと告げました。

ジョニーは驚きました。自分は正式にやとわれたものと考えていたからです。一体どういうことだろう、とふしぎに思いました。

なんと次の日、ふたたびあの看板がかかげられました。『男子アルバイト生募集』と書いてあります。

しかし、12時には看板がなくなっていました。こんどはチャーリー・ジョーンズがやとわれました。彼は、閉店の一時間前まで、忙しく小間使いの仕事をしました。それからピータースさんは、かれを屋根裏に行かせ、あの長い箱に入ったものを整理整頓するよう言いつけました。

チャーリーはねずみも暗い所も怖くはありませんでしたが、その箱に整理したほうがよさそうなものは、何も見つけることはできませんでした。しばらくの間、彼は箱の中を引っかきまわしていました。全部ガラクタのように見えます。結局チャーリーは、２、３本の曲がっていない釘と、１つか２つの鍵を選びだして、下にいるピータースさんに持っていきました。

「このまま保管しておいた方がよさそうなものは、全部でこれだけでした。」チャーリーはピータースさんに言いました。「他のものは全部さびているし、曲がっているから・・・わざわざ片付ける意味はないんじゃないかと思いますよ。」

（つづく）

第8章
契約の箱を守る天使

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「わたしは主である、これがわたしの名である。わたしはわが栄光をほかの者に与えない。また、わが誉れを刻んだ像に与えない。」イザヤ書 42:8

日曜日

神様が初めてサムエルにお語りになったとき、彼はまだ子供でした。また、モーセが小さな家を出てファラオの宮殿に住むようになったのも、幼い頃でした。モーセとサムエルのどちらも、どんなことがあっても神様を愛し、信頼し、また神様にしたがうことを選びました。なんと賢い選びをしたことでしょう！神様はご自分の民を助けるために、このふたりをお用いになりました。

もし、サムソンやエリが同じような選びをしていたならば、神様は彼らのまちがった習慣を正すよう助けを与えたでしょうか？そうしていれば、ペリシテ人は、とうに征服されてしまっていたことでしょう。しかし今、サムエルが成長するにつれ、ペリシテ人はふたたび強大な敵になりつつありました。

エリの息子たちが悪人であることは、イスラエル中の人が知っていました。神様がサムエルと話した後、人々はすぐに彼のことも知るようになりました。まだ神様に忠実な信仰を持っていた人々がシロで礼拝をして家に戻ると、彼らは神様がサムエルに語られたことを他の人々に伝えました。

間もなく人々は、サムエルがいつか指導者となり、さばきづかさ、また預言者にもなることがわかりました。しかし、彼はまだ若者にすぎないのです。サムエル記上 3:19-21。

イスラエル人は彼らの敵、ペリシテ人に戦いを挑むことを決意しました。彼らは神様にそのことを尋ねることをせずに、敵と戦おうとしていました。サムエル記上 4:1。

考えてみよう：イスラエル人が敵に勝つことは、神様のご計画でしたか？もちろんそうでした！しかし、神様はイスラエル人を助けることがおできになるでしょうか？できるとしたら、それはなぜですか？できないとしたら、それはなぜですか？

月曜日

ペリシテ人は、神様の幸福のルールについて知っていました。しかし、よくよくイスラエル人を見ていると、彼らは偶像を礼拝し、自分たちのようになっていくので、結局イスラエル人の神様はそれほど強くないのだ、と判断したのでした。間もなくペリシテ人は、イスラエル人を無理やりしもべにしようとしはじめました。それで、イスラエル人は戦う決心をしたのです。戦いの場所は、シロからそれほど遠くありませんでした。戦いに勝ったのは、どちらのほうでしたか？サムエル記上 4:2。

4000 人ものイスラエル兵が、敵によって殺されました。なんということでしょう！またイスラエルの長老たちには、それが理解できませんでした。神様はどうして助けてくださらなかったのだろう、とふしぎに思いました。彼らは、神様の約束にふくまれている、大切な条件を忘れてしまったのでしょうか。ヨシュア記 23:10 － 13。

それから彼らは、ある計画を思いつきました。これでもう、何があっても勝てると確信したのでした。サムエル記上 4:3。

彼らはただちに、20 マイル離れたシロへ使いを送りました。そこには、エリの息子、ホフニとピネハスがいました。ふたりは、この計画に大賛成です。この計画について神様にたずねることをせず、また許しを得ることなしに、神様の契約の箱を聖所から持ち出して、イスラエル人とペリシテ人の戦場へと運んでいったのです。ホフニとピネハスが神の契約の箱を担いで宿営所に行進してきたのを見て、イスラエル兵は何をしましたか？5 節。

また、契約の箱が持って来られたことを知ったペリシテ人は、どう思いましたか？6-8 節。

考えてみよう：ペリシテ人は、イスラエル人をずっと観察してきました。神様を愛していない人々、また神様の幸福のルールを信じてもいない人々は、私たちの言う

事やする事を見ていると思いますか？私たちにとっても、世の人たちと同じようなかっこうをしたり、同じように行動したりするほうが楽でしょうか？彼らと同じテレビ番組を見て、彼らと同じ場所へ出かけて行き、同じ食物を食べ、ときには世の人々と同じような服装をしていないでしょうか？考えてみましょう。

火曜日

契約の箱がエリコの戦いに持って行かれたときにイスラエルが勝利したことを、ペリシテ人は知っていました。当然ながら、彼らは震え上がりました！そして、もしその日にイスラエルが勝てばどうなるかを考えました。そうなったら、ペリシテ人がイスラエル人に仕えることになるでしょう。そこで、彼らは何をしようと決めましたか？サムエル記上 4:9。

ペリシテ人はその戦いにも勝ちましたが、他にどんなことが起こりましたか？10-11 節。

初めの戦いで4000人もの兵士を失ったのは悲しい事実ですが、さらに30000人もの兵士が死んだということを考えてみてください！おまけに、契約の箱までもが敵にうばわれてしまったのです！

ホフニとピネハスは、同じ日に死にました。神様がそうなると言われたとおりになったのです。サムエル記上 2:34。

ずっとむかし神様は、もし人々が神様を愛し、信頼し、神様にしたがうことを選んだら、何を約束してくださいましたか？ヨシュア記 23:8-11。人々が約束に忠実であったときには、神様は約束どおり彼らをお助けになりましたか？ヨシュア記 2:45。

しかし、もし人々がサタンの声に聞きしたがうことを選んだとしたら、神様は彼らを助けることがおできになったでしょうか？それはできません。

そして今、彼らは国がはじまって以来、かつてなかったほどの最も恐ろしい事に悩まされていました。聖なる契約の箱が、神様を信じていない敵の手に渡ってしまったのです。うるわしい聖所の中から、もっとも大切な部分が取り去られたというのです。契約の箱がおかれていた場所には、もう何もありません！

考えてみよう：ペリシテ人は、この契約の箱はイスラエル人にとっての偶像の神だと考えていましたし、イスラエルの民でさえ、契約の箱の中にある石の板に書かれている事に

したがうのが大切なのだということを忘れていました。従順は、勝つか負けるかの戦いの結果に大きな影響をおよぼします。神様は彼らを祝福したいと願いましたが、できなかったのはそのためです。「幸福のルールに従う」という選びは、サタンが私たちを誘惑するときに勝利できるかどうかに関係がありますか？

水曜日

さて、シロの町では、年老いて目もほとんど見えなくなったエリが町の門にすわり、不安そうに戦いの知らせを待っていました。何より、そこから持ち出された契約の箱のことを、とても心配していました。箱は、どうなってしまうのでしょうか？また、ふたりの息子に何かあったのでしょうか？かれは、息子たちが生きている間、彼らが神様の幸福のルールに従わないままにさせてきたのです。

ついに、ひとりの使者が戦場から駆けもどってきました。ひじょうに悪い知らせをもって町に駆け込んできたその使者は、エリのそばを通りすぎました。サムエル記上 4:12-13。

町中ですすり泣く声、泣き叫ぶ声が聞こえたので、エリは一体何が起こったのかと気になりました。なんとしても、聞き出さなければ！悪い知らせをもってきた男が、急いでエリのところへもどってきました。14-17 節。

エリは、使者の話を聞きました。イスラエルは戦いに負け、ホフニとピネハスは戦死したと言われましたが、それは覚悟していたことでした。しかし、聖なる契約の箱がペリシテ人に奪われたとの知らせは、耐えられないものでした。18 節。

その同じ日、ピネハスの妻は男の子を産みました。彼女は神様を愛していました。契約の箱がペリシテ人に奪われたことと、自分の夫とエリが死んだことを聞き、悲しみのあまり彼女も死にました。19-22 節。

***考えてみよう：**もしもエリが、息子たちがまだ小さいうちに、話して聞かせるだけでなく、罰を与えていたなら、このようなことにはならなかったと思いますか？彼らが父親にしたがっていたならば、もっとたやすく神様にしたがうことができたでしょうか？両親が罰を与えるのは、したがう訓練をすることがとても大事だとわかっているからですか？*

木曜日

聖所の奥のへやである至聖所の中は、からっぽになってしまいました。そこにあった契約の箱は、どこにあるのでしょうか？サムエル記上 5:1-2。

ペリシテ人は大喜びです。この契約の箱こそ、イスラエルが礼拝していた力ある神だと考えたからです。今や彼らは、その契約の箱のほかに、自分たちの神ダゴンももっているのですから、すべての戦いに勝つ自信にあふれていました。

アシドドにある異教の宮に契約の箱をおいた翌日、人々は朝早くそこへ行きまし

たが、そこで見た光景にぎょっとしました。ダゴンの神はどこにありましたか？ 3 節。

ダゴンの神の上の部分は人間のようで、下の部分は魚に似ていました。すぐさま人々は、ダゴンの神をもとどおりにおきました。ところが翌朝になってみると、また同じことが起きているではありませんか。しかも、こんどはもっとひどい状態なのです！ 4 節。

彼らの神がバラバラにこわれていただけではありません。多くのペリシテ人が、ひどい腫れ物の病気にかかりました。そこで、アシドドの人々は、どうすることに決めましたか？ 6-8 節。

ガテの町、エクロンの町では何が起こりましたか？ 9-10 節。

契約の箱が持ちこまれた町では、どこでも何か悪い事が起こりました。それで、とうとう契約の箱を町はずれの畑においたのですが、畑の作物と、さらに納屋に保存してあった食料までもが、ネズミに食べられ始めました。

7 か月後、ペリシテ人は、契約の箱が彼らにとって全く役に立たない、と判断しました。5 人の指導者が集まって話し合い、その中の賢い人たちは、神様がエジプト人にした事を皆に思い出させました。

この賢い人たちは、新しい荷車を作って契約の箱をそこに入れ、契約の箱に贈り物をくわえるように言いました。その贈り物とは、彼らの食料を荒らしたネズミを型どった 5 つの金の像と、彼らを病気にしたあの腫れ物を型どった 5 つの金の像です。そしてこの荷車を引くのは、子牛を産んだばかりの 2 頭の雌牛でなくてはなりません。また、子牛は牛小屋に閉じこめておきます。もし、雌牛が自分から子牛を離れて契約の箱を乗せた荷車をイスラエルの方向へ引いていくならば、ペリシテ人が契約の箱を持つことをイスラエルの神様が望んでいないために、これらの悪い事がふりかかったのだということを、ペリシテ人たちは知るでしょう。

考えてみよう：この時、神様は、契約の箱に入っている石の板に書かれた幸福のルールを保護しておられたでしょうか？そうです。これらの幸福のルールは、今でも大切でしょうか？

金曜日

さあ、いよいよそれをテストする時がやってきました。契約の箱は荷車に乗せられ、雌牛たちは荷車を引く

用意ができました。子牛たちはそれについていくことができないように小屋にしっかりとつながれています。はたして雌牛たちは、自分の赤ちゃん子牛をおいて行くのでしょうか？ペリシテ人たちは、どうなるかを見守っています。

モ～モ～と大きな声で鳴きながら、雌牛たちは赤ちゃん子牛に背を向け、イスラエルの町ベテシメシへの道を進み始めました。これによってペリシテ人は、イスラエル人の神様が自分たちの神より強いということが、ようやくわかったのです。サムエル記上 6:11-12。

まもなくして、ベテシメシの畑で働いていた人々に、雌牛たちの大きくなく声が聞こえました。見上げると、契約の箱を乗せた荷車を、雌牛が引いているではありませんか。そこで、彼らは何をしましたか？13-16 節。

そのニュースは、あっという間に広まりました。「契約の箱が戻ってきたぞ！」人々は大あわてで町から飛び出してきました。すぐにそこは、契約の箱を見にきた、何が起きたのかを話す興奮した人々でいっぱいになりました。

人々は、契約の箱がどれほど神聖で大事にすべきものであるかの規則を知ってはいたのですが、中をのぞいて見たくてたまりませんでした。がまんしきれずついに、だれかが、かけられていた覆いを大胆にもとりのけたので、すぐにおおぜいの人たちが中をのぞきこみました。これは、異教のペリシテ人ですら、あえてしなかったことでした。

ただちに、イスラエルの民に、神様をおそれうやまうことを教える必要がありました。その時、たくさんの人が死に、残された者たちは恐れおののきました。人々は、どうか契約の箱を他の町にもって行ってくれるようお願いしました。そこで、レビ族の人たちがやってきて契約の箱を引きとり、レビびとのアビナダブという人の家へもって行き、契約の箱は長い間そこにおかれました。

考えてみよう：私たちは教会の中で、もっと神様を敬う態度ができますか？私たちはいつ、家庭で礼拝をしていますか？いつ、ひざまずいて祈りますか？イエス様に食事を祝福してくださるようお祈りするときにも、ひざまずいてお祈りすべきですか？あなたはどう思いますか？

もっと学ぼう！

★サムエル記上 4-6 章
★人類のあけぼの 57 章
★あがないの歴史 p. 226—235

男子アルバイト生募集—パート2

エイミー・シェラード

またしても、ピータースさんの看板が窓にかかげられました。こんども『男子アルバイト生募集』と書かれています。

これを見たジョニーとチャーリーは笑って、やっぱりピータースさんは、今まで会った人の中で一番の変わり者だな、と思うことにしました。ふたりとも雇われるつもりで仕事に行ったのに、ピータースさんは、彼らを一日使っただけで雇わなかったのですから。

さて、トム・ミルスがこの仕事に応募しようと店に行ったとき、彼はジョニーとチャーリーについては何も知りませんでした。ですから、あの暗くて冷たい屋根裏部屋にある長い箱、さびた古いネジや釘、ボルトやその他いろんなものが入ったあの箱についても、いっさい知らなかったわけです。

働き始めて２日目の朝、もう小間使いの用もなくなったころ、ピータースさんはあの箱を片付けさせるため、かれを屋根裏へ行かせました。

お昼ご飯の時間になりましたが、トムはまだ屋根裏にいました。「もう終わったかね?」ピータースさんは呼びかけました。

「いいえピータースさん、まだまだすることがたくさんあるんです。」トムは答えました。

「そうかそうか。でももうお昼ご飯の時間だからね。帰ってご飯を食べた後で、また続きをやりなさい。」トムは、ピータースさんのいうとおりにすることにしました。

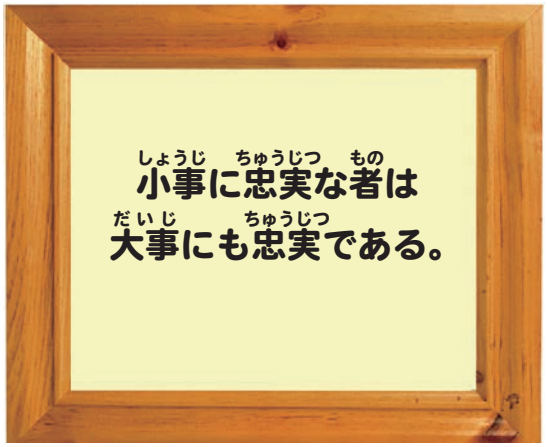
トムは、午後の時間ずっと屋根裏で作業をつづけました。そして、ピータースさんがもういちどトムに声をかけようとしたころ、ようやく階段をおりてきました。「ピータースさん、できる限りのことはすべてやりました。」トムは言いました。「あと、箱のいちばん底のほうに、これがあるのを見つけました。」そういってトムは、金の 10 ドル硬貨を出しました。「ふつうは、あんな場所で金が見つかることはないんだがな、そうだろう?」ピータスさんはそういいながら、トムから硬貨を受けとり、ポケットにしまいました。そして、トムにこう言いました。「君がこれを見つけてくれて本当にうれしいよ。ぜひ明日も来てくれ。」

トムが家へ帰った後、ピータースさんは屋根裏へ行ってみました。あの長い箱があり、中の物すべてが注意深くより分けられて、箱の小さな仕切りに並べられていました。それぞれの仕切りには、きちんと

ラベルがはられています。ピータースさんは満足そうに微笑みました。「よし」彼はひとりつぶやいて言いました「ようやく私の求めていた少年に出会えたぞ。それにこの子は金も見つけてくれた。いい子で、注意深い働き手で、正直者だ。10ドル硬貨を自分のポケットに入れてしまうことだってできたはずなのに、それをしなかった。実は私が硬貨の存在を知っていたなんて、彼は気づいてもいないはずだからな。」

ジョニーとチャーリーは、トムが雇われたと聞いたとき、長続きしないだろうと思っていましたが、あの看板はもう窓にはかけられず、学校が始まり、授業が終わると、トムは仕事に行くのです。

ジョニーとチャーリーには、どうしてピータースさんが彼らをやめさせてトムを雇ったのかが全くわかりません。でも何年も後になって、ピータースさんの店に行ったなら、こう書かれた看板を見たことでしょう、『ピータース・ミルズ会社』。トムはもう小間使いの少年ではありません。ひとりのお金持ちの青年になっていました。そして彼の事務所の壁には、彼がピータースさんのもとで働くようになってまもなく、ピータースさんからもらった額ぶちの標語がかけられていました。そこにはこう書かれています。「小事に忠実な者は大事にも忠実である。」



（終わり）

第9章
ひとと同じようになりたがる

暗唱聖句

「すべての道で主を認めよ。そうすれば、
主はあなたの道をまっすぐにされる。」箴言 3:6

日曜日

ペリシテ人がイスラエルに契約の箱を返して後20年もの間、契約の箱は、あるレビびとの家におかれたままでした。その間もずっと、ペリシテ人がイスラエルを治めていました。

エリが亡くなった後、サムエルは人々を訪問するため、国のあらゆる所へ旅をしました。町から町へとめぐり歩き、人々がかかえている問題は神様に信頼し従わなかったために起きたのだ、ということをできるかぎり教えました。サムエル記上 7:3。そしてついに、人々はサムエルが正しいことを認めました。そこで、彼らは何をしましたか？4節。

サムエルはどんなに喜び、感謝したことでしょう！かれは、ある重要な集会を開くことを計画しました。それはどこで行われましたか？また彼らは、そこで何をしたでしょうか？5-6節。

神様の民は、これまでしてきた悪い事、つまり神様を悲しませ、彼らの敵にまで神様をあざ笑わせてしまったことを、深く反省しました。ようやく今、もういちど、神様に忠実に仕える決心をしています。

この集会は、ペリシテ人との戦いのときに、エリの悪い息子たちが契約の箱をもってきた場所の近くで開かれました。エリの息子たちが殺され、敵がこの聖なる契約の箱をうばって行った場所です。ですから、

ペリシテ人は、今またイスラエルに攻撃されるのではないかと考えました。何が起こりましたか？ 7 節。

こんどこそイスラエル人は、神様に信頼するでしょうか？答えは、明日の勉強でわかります。

考えてみよう：イスラエル人の神様に対する態度を考えてみて下さい。もし誰かがあなたに同じようなことをしたら、あなたはその人をゆるして、助けてあげたいと思うでしょうか？私たちが悪かったと心から反省するときに、神様が私たちをゆるしてくださることを嬉しいと思いませんか？

月曜日

20年前にペリシテ人が戦いに勝利して契約の箱をうばった場所の近くで、イスラエル人は集会を開いていましたが、ふたたび、ペリシテ人がイスラエル人に戦いを挑んでやってくるというのです。

以前は、イスラエル人は敵から逃げるか、または神様に助けを求めずに戦っていました。

しかし、こんどは違います。彼らは偶像をとりのぞき、まことの神様だけを拝んでいます。また、一日中断食をして、彼らの犯した罪を告白しました。そしてペリシテ人が彼らに迫ってくるとき、イスラエル人は、神様に祈って自分たちを救ってくださるようサムエルにお願いしたのでした。サムエル記上 7:6-8。

サムエルが神様に犠牲をささげて祈ったとき、神様は祈りを聞き、お答えになりました。 9 節。

サムエルが犠牲をささげている最中に、とつぜん雷鳴がとどろきました。黒い雲はどこにも見当たりませんが、稲妻がいたるところで襲いかかっています。そして恐ろしい嵐は、まさにペリシテ人の所にだけ吹き荒れているのです。恐れをなした兵士たちは、イスラエル兵に追われながら命からがら逃げていきました。10-11 節。

神様は約束どおり、ご自分の民を助けてくださったのです！サムエルは、神様に感謝をささげることを忘れませんでした。12 節。

人々は、自由になった喜びをかみしめながら家に帰りました。13-14 節。

考えてみよう：神様がお約束をはたしてくださった経験を人々に思い起こさせるために、サムエルはひとつの石を標（しるし）として用いました。イエス様があなたやあなたの家族のために特別にしてくださったことを、書き出してみようと思ったことはありますか？とてもよいことですので、ぜひやってみて下さいね！

火曜日

サムエルはすぐれた指導者でした。すべてのことがきちんとなされているかを知るために、彼は毎年何をしましたか？サムエル記上 7:15-17。

サムエルは長い間エリと一緒にくらした

後だったので、子供たちが従順（言うことを聞いてさからわないこと）を学ぶのがどれほど大切かを知っていたと思いますか？彼はあちらこちらへ出かけて行き、親から子供へ神様の幸福のルールを教えるように命じました。また親たちは子供たちに、神の民が完全に神様に信頼し従ったときに、神様が彼らにしてくださったことを伝えなくてはなりませんでした。

サムエルはまた、ふたつの「預言者の学校」と呼ばれる特別な学校をつくりました。その学校で、青少年たちは、イスラエルが強い国になるために神様が与えて下さった規則を学びました。彼らはまた、どうしたらイエス様のための特別な働き手となれるかを学びました。そしてすべての生徒が、自分自身や家族を養うことができるようになるために、いろいろな仕事の仕方を学びました。

サムエルは自分の息子たちにも教えてはいましたが、時々甘やかしてしまうことがあり、息子たちはサムエルの模範（お手本）にならいませんでした。サムエルが年老いて、これまでよりも仕事の手伝いをする人が必要になったとき、自分の息子たちに手伝いをさせてもよいかどうかをイスラエルの指導者たちに相談すると、指導者たちはみな賛成しました。サムエル記上 8:1-2。

考えてみよう：家庭で学校をしている子供たちもいれば、教会学校にかよっている子供たちもいます。公立の学校では、神様のことが教えられていますか？なぜでしょう？ほとんどの子供は、大人になったら何になりたいかを考えますが、その考えはなんども変わったりします。両親は私たちが成長していくのにあわせて、やりがいがあって役に立つ仕事を選んでいけるように助けてくれることでしょう。

水曜日

サムエルは息子たちに、従順で正直であるようにと教えました。しかし、彼らがサムエルの手伝いをするようになったとき、サタンが彼らに悪い事をさせようと誘惑したのです。息子たちは、サタンの誘惑に耳をかたむけたのでしょうか？サムエル記上 8:3。

「まいない〔わいろ〕をとる」とは、お金をもらって本当ではないことを言ったり、何か悪いことをしたりするという意味です。まいないをとる人なんて、だれも信用できませんよね。

息子たちがこのような悪い事をしているのを、サムエルはまったく知りませんでした。もし知っていたならば、すぐにこの仕事を彼らから取りあげていたことでしょう。このことを聞いただけでもとても悲しかったのですが、イスラエルの指導者たちがのぞんでいることを聞いたとき、サムエルはますます悲しみました。4-5節。

サムエルはいつも、神様のご計画に忠実に働いてきました。イスラエルの人々は敵から守られ、彼らは何年もの間、平和を楽しんでいました。人々は、それに感謝していたでしょうか？

サムエルは、怒らずに何をしましたか？彼らが王様を欲しがる本当の理由について、神様は何とおっしゃいましたか？6-7節。

なんと、またしても、彼らは自分のまわりの国々と同じようになりたいと願ったのでした。サムエルは彼らに、王様をたてればどうなるのかを話してきかせました。さいごには、王様をたてたことを後悔するはずでした。たとえ良い王様だったとしても、自分の一番よい土地や家畜を差し上げなくてはなりませんし、高い税金だって払います。彼らの息子たちも兵隊としてとられてしまうでしょうし、娘たちは王様のために働くことになるでしょう。

しかし、どんな理由も彼らの考えを変えることはできませんでした。そこでサムエルは、神様ともういちどお話ししました。サムエル記上 8:19-22。

神様は、イスラエル人たちの求めているような人物をお選びになりました。その人はイスラエルの中で一番背が高く、一番美しい顔立ちの男性です。名前はサウル、その父親の名はキシといいました。ベニヤミン族という小さな部族の出身です。サムエル記上 9:2。

考えてみよう：あなたは今までに、本当はそこまで必要ではないのに、とにかく欲しくておねだりしたことはありますか？「他の子供たちは全員もってるんだよ！」と言いませんでしたか？それは正しい理由でしょうか？

木曜日

ある日のこと、サウルの父のキシは、サウルと召使いを使いにやりました。なぜですか？サムエル記上 9:3-4。

彼らはロバを見つけることができなかったので、家へ帰ることにしました。なぜでしょうか。5節。

しかし彼らは、近くの町にサムエルが来ていることを耳にしました。サムエルは預言者ですから、もしかしたら彼らのロバを見つけてくれるかもしれません。彼らは町で、特別な食事のために出かけていたサムエルと会いました。神様は前の日に、サムエルがサウルに会うことを彼に告げておられました。サムエルが背の高い、美青年のサウルを見たとき、神様は彼になんとおっしゃいましたか？18-20節。

サウルは、サムエルが何を言いたいのかわかりました。サムエルは彼に、イスラエルの王になるべきだと言っているのです。彼はサムエルに何と言いましたか？

21節。

いっしょに食事をした後、サムエルは、召使いを先に帰らせるように言いました。サウルとふたりで話したかったからです。サムエル記上 9:27-10:1。

サムエルは、サウルが王様になることをねたんではいませんでしたね。それどころか、サムエルは彼をとても気に入り、彼が良い王様となってくれるよう願っていました。

家に着いたサウルは、自分がイスラエルの王様となるためにサムエルが油を注いでくれたことは、だれにも言わないでおこうと思いました。彼に起こったことを、おじさんが聞いてきたとき、サウルはどう答えましたか？サムエル記上 10:14-16。

考えてみよう：わがままになるのと、そうならないのと、どちらがたやすいですか？サムエルはどうでしたか？

金曜日

イスラエルの民はこれまで王様を立てたことがありませんでしたが、じつはそれが、彼らが世界のどの国々とも違っている理由でした。私たちの力強い神様が彼らの王様であり、イスラエルが神様に信頼してしたがっているときは、だれも彼らに害を加えることはできないのを、他の国の人たちはわかっていました。周辺の国々には、戦いに行くときに指揮をとる王様がいました。そして、イスラエル人は彼らのようになりたいというわけです。つまり、自分たちも王様がほしいということです。情けないですね！

王様をたてることは、まったく神様のご計画ではありませんでした。神様は、人々が神様にではなく、王にたより始めるだろうというのを知っておられました。また、彼らの王様が神様にたよらなければ、神様は人々を祝福したくても助けたくても、できないのです。

しかし神様は、ご自分の計画を無理におしつけたりなさいません。神様は、王様をたてさせることにしました。それどころか、人々が求めているような人物を選んでくださったのです。すらっと背が高く、顔立ちの美しい人が、王様に選ばれました。

イスラエルの民がいよいよサウルと顔をあわせる日に、サムエルは人々を呼び集めました。どの部族からも、大勢の人がきています。サムエルは、彼らになんと言いましたか？サムエル記上 10:17-19。

サムエルは人々に、王様を選んだのは神様であることをわかってほしかったのです。それぞれの部族の名前が呼ばれたあとで、神様はベニヤミン族をお選びになりました。それから、ベニヤミン族の家系

から、キシを選ばれました。さらに、キシの子供たちの中から、サウルをお選びになったのです。しかし、サウルはどこにいるのでしょう?だれも彼を見つけることができません。神様は、彼がどこにいるかごぞんじでしたか? 22-24 節。

考えてみよう: *背が高くて、顔が美しいことだけが、良い王様に求められることですか?サウルはとても謙遜〔へりくだること〕でした。もし彼が謙遜で従順でありつづけたなら、神様は彼を祝福することができたでしょうか?神様は今でも、謙遜であろうとする人々を祝福なさるでしょうか?*

もっと学ぼう!

★サムエル記上 8-10 章

★ 人類のあけぼの 59 章

ハリエットのテスト

エイミー・シェラード

ハリエットは、お母さんといっしょに買い物をしていました。ふたりが道路をわたったとき、ハリエットはお母さんよりも1、２歩後ろを歩いていましたが、ふと下に目をやると、縁石のところに財布が落ちているのを見つけました。財布を拾うときにはだれも見ていませんでしたので、ハリエットは急いで自分のコートのポケットにそれを押しこみました。

「見つけた人がもらっていいんだよね」とハリエットは思いました。「お金が入っていたらいいな。」

「あなたはお母さんに、それを見つけたことを報告するべきです。」小さな声が彼女の頭の中でそう言っているようでした。しかし、ハリエットは心の中で答えました。「いやよ。これ私のだもの。お母さんには言わなくったっていいの、いいの。」

家に着くと、ハリエットは急いで部屋に行き、財布の中を見てみました。お金を数えながら、うれしくてドキドキしています。中にはなんと、パリパリの10ドル札が入っていました!こんなにたくさんのお金を得たなんて、信じられませんでした。

「これはあなたのお金ではありません。」小さな声が言いました。「財布の中に持ち主の名前があるかどうか、たしかめるべきです。」

見たくありませんでしたが、結局そうすることにしました。やはり、中のポケットに、持ち主の名前と住所が入っていました。

「でも返さなくたっていいんだから。」ハリエットは小さな声に言いました。「だって持ち主の男の人は、だれがひろったかなんて知るはずないわ。それに、これだけのお金で何が買えるか、考えてみてごらん!」10ドル札を見ながら、ハリエットはこんなことを考えていたのでした。

それでもまだ、あの小さな声は話しつづけます。「楽しくはなりません。今この時も、あなたは心から喜んではいないのです。」ハリエットは、この小さな声が自分の良心であることに気づきました。そして、それは正しいことを言っているのです。彼女はいやな気持ちになりました。

「お母さんに話しなさい。」小さな声は

さらに強く言いました。「両親があなたの最高の友だちだということは知っているでしょう。」ハリエットはため息をつきました。それから、彼女は安息日学校で学んだ聖書の言葉のことを考えました。「あなたは盗んではならない。」彼女は、自分がどろぼうになっていることに気づきました。こんないやなことを考えていたハリエットは、財布を閉じて、一階で夕食を作っているお母さんのところへもって行きました。

何があったかをハリエットが話している間、お母さんは静かに聞いていました。ハリエットはまた、自分がどんなことを考えていたかもお母さんに話しました。お母さんは、両手で幼い娘を抱きしめました。

「じゃあ、あなたは何をするべきだと思う?」お母さんはたずねました。

ハリエットにはもう答えがわかっています。「パパにたのんで、持ち主の男の人のところへつれて行ってもらって、財布を返すの。名前は、ジェフェリーズさんよ。」

お母さんは喜びました。お父さんも、喜んでその住所までつれて行ってくれました。ジェフェリーズさんは、財布が戻ってきたので大喜びです。彼はハリエットにお礼を言って、彼女が帰る前に財布から一枚の10ドル札をとり出しました。「これをもらってほしいんだ。君のような正直な子がいることを僕がどれだけ嬉しく思っているか、知ってほしくてね。」ジェフェリーズさんはそう言って、お金を受けとるよう、強くすすめました。

ハリエットは、ジェフェリーズさんに心からお礼を言いました。お父さんとそこを去るとき、うれしさがこみあげてきました。もういやな気持ちはありません。なぜかって?小さな声に耳をかたむけて、正しいことをすることを選んだのですからね。ハリエットと両親の他に、だれが喜んでくれたと思いますか?

第10章

高ぶりはじめたサウル王

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「従うことは犠牲にまさり、
聞くことは雄羊の脂肪にまさる。」
サムエル記上 15:22

日曜日

イスラエルの民が王様を欲しがったのは、他の国々のようになりたかったからでした。神様は、彼らの思うようにさせましたか？はい、彼らが望むものをお与えになりました。王様の名前はサウル。イスラエルの中で一番背が高く、一番顔の美しい男の人でした。

サウルを人々に紹介した集会で、サムエルは、王様がするべきことと、どのように振る舞うべきかを話しました。それから、みんなを家に帰しました。サムエル記上 10:25-26。

ところが、すべての人が喜んだわけではなく、サウルはそれを知っていました。王様をだれよりも望んでいた部族の人々が、不平を言っていました。神様はなぜ、一番小さな部族から王様をお選びになったのでしょうか？なぜ一番大きくて勢力のあるユダ族やエフライム族から、お選びにならなかったのでしょう？なぜ、小さな

ベニヤミン族出身のひとりの男が、王様になるべきだったのでしょう？ 27 節。

さいわい、サウルは謙遜〔へりくだること〕でありつづけ、神様にすべてのことをおまかせしました。

そこへ、イスラエルの町のひとつである

ヤベシ・ギレアデに、アンモン人が戦いを仕掛けているとの知らせが入ってきました。使者たちは、急いでこのことを皆に知らせました。彼らがサウルの町へ来たとき、サウルは何をしましたか？サムエル記上 11:4-7。

サウルは、少しも時間をむだにしませんでしたね。彼は急いで、イスラエル全国の兵士たちに使者を送り、ヤベシ・ギレアデの人々を助けるためにすぐさま集まってほしい、と伝えました。何千人ものイスラエル兵が集まり、彼らはたった１日で敵を打ち負かしました！

考えてみよう：サウルが聖霊にしたがっていたことに、あなたは気がつきましたか？それで、イスラエルの民は勝利できたのです！私たちも、神様に信頼してしたがうときに、力ある聖霊が一人ひとりと共にいてくださるでしょうか？もちろんです！それって、すばらしいことですよね？

月曜日

イスラエルの民は満足していました。王様を立てて以来、初めての戦いで勝利をおさめたからです。

小さなベニヤミン族出身のサウルを神様が選ばれたことについて文句を言っていた者たちのことを、ある人たちは覚えていて、彼らに罰を与えるべきだと考えていました。しかし、サウルは何と言いましたか？サムエル記上 11:12-13。

すばらしいことに、この時もサウルは謙遜でありつづけました。勝利を与えて下さったのは神様であると知っていたからです。

サウルはすでに、サムエルによって油を注がれていました。そして、彼が王様として選ばれたことはみんなが知っていましたが、まだ正式にお祝いの儀式をしていませんでした。そこで、サムエルはもういちど、人々を呼び集めました。

今回は、ギルガルでの集まりです。昔、ギルガルではいろいろな事がありました。ここは、イスラエルの民がヨルダン川を渡った後、カナンの地に入り、最初にテントを張って泊まった場所です。マナが降らなくなったのもこの場所でした。また、ここから出発してエリコまで行進し、神様があの城壁を崩されるのを見たのでした。そして、あの欲張りのアカンが、エリコから盗んできた物を自分のテントの下に穴をほり、隠したのもこの場所でした。

この集会で、サムエルは人々に、彼が指導者であった間に何か間違いを犯したことがあったかどうかをたずねました。彼らはなんと答えましたか？サムエル記上 12:4。

それからサムエルは、神様が行ってくださった数々の奇跡を思い起こさせました。また、人々がなんども神様との約束をやぶり、信頼せず、したがわなかったことも思い起こさせました。彼らは今、神様

の代わりにひとりの人間を王様として立てたいと願っています。他の国々と同じようになりたいからです。神様は王様をお選びになりましたが、彼らとその王様が神様にしたがうときにしか祝福を与えることはできません。13-15 節。

人々は、自分たちが神様の祝福を受けるのにふさわしくないことを認めて、それでも自分たちのために祈ってほしいとお願いしました。サムエルは、そうすると言いましたか？ 23-25 節。

考えてみよう：サムエルは、まことの愛とゆるしを表しましたか？それは、いつでも簡単にできることでしょうか？

火曜日

サウルの軍隊の中で、サウルと息子のヨナタン以外に剣や槍を持っている者は、なんとひとりもいませんでした！というのは、いじわるなペリシテ人たちがイスラエルを治めていた頃、イスラエルの民が剣や槍を作ることをゆるさなかったからです。サムエル記上 13:19-22。

サウルが王になって少し後に、息子のヨナタンがペリシテ人の砦〔敵の攻撃を防ぐ小さな建物のひとつ〕を攻めて、戦いに勝ちました。このことがペリシテ人を怒らせ、彼らはイスラエルの民と戦おうと決めました。ペリシテ人のたくらみを知ったサウルは、すぐさま味方の軍隊を呼びよせました。

イスラエルの民は神様の助けが必要になることをサムエルは知っていましたので、戦いの前に、彼らのために祈りをささげに行くことを約束しました。サウルは、７日の間サムエルを待たなくてはなりませんでした。

サウルの兵士たちは、待っている間にだんだん怖くなってきました。ペリシテ人がたくさんの戦車と馬をもっていて、剣や槍を手にした何千人もの兵士がいることを知っていたからです。彼らは何をし始めましたか？サムエル記上 13:6-8。

今こそ、神様に信頼していることを示す絶好のチャンスです。サウルは兵士たちに、落ち着いて勇気を出すように励ますべきでした。神様が彼らを助けてくださるので、怖がらなくもよかったのです。ところがなんと、サウル自身が落ち着きをなくしてしまいました。神様に信頼してサムエルを待つことはしないで、ある特別な人たちだけがするべきことをしてしまいました。それは何でしたか？ 9 節。

ようやくサムエルが到着したとき、サウルは何と言い訳しましたか？ 10-12 節。

考えてみよう：したがわなかったことへの言い訳をするのは、アダムとエバが罪を犯した後、最初にしたことのひとつです。そうしてしまうのは、自然で簡単なことですか？

水曜日

特別な人たちだけが犠牲の供え物をささげるべきだというのは、イスラエルの民全員が知っていました。これで、自分たちの王であるサウルが、とても

神聖な決まりにしたがわなかったことを、彼らは知るでしょう。このことは、神様の決まりにしたがうことは、結局それほど重要ではないのだと、人々に思わせてしまうでしょう。

サウルの言い訳を聞いた後、サムエルは何と言いましたか？サムエル記上 13:13-14。

したがわなかったことの言い訳をする代わりに、サウルが神様に信頼することを選べていたなら、どんなによかったことでしょう！どんな時でも神様に信頼し、したがう王様がイスラエルには必要でした。

この時までに、兵士たちのほとんどが去って行ってしまいました。ある者たちは岩かげやほら穴にかくれ、またある者はヨルダン川の向こう岸へ渡ってしまっていました。みんな怖かったのです。ふたりをのぞいては。

サウルの息子のヨナタンは、父親とはまったく似ていませんでした。ヨナタンは神様を愛し、信頼し、神様にしたがっていました。そこで神様は、彼の心にある計画をお与えになりました。ヨナタンは、自分の武器を運んでくれる信仰深い青年にこの計画を打ち明け、彼らはそれを実行することにしました。サムエル記上 14:6-7。

まず、ヨナタンはしるしを求めました。ペリシテ人と戦うという神様のご計画に、自分たちがしたがっているかどうかを確かめたかったのです。8-10 節。

ペリシテ人の見張り役たちは、このふたりの兵士の姿を見てばかにして笑いました。イスラエル人が隠れていた穴からのこのこ出てきたぞ、というのです。11-12 節。

ところが何と、ペリシテ人の見張り役たちは、まさにヨナタンが求めたしるしの言葉を語ったのでした！静かに、見られないように、ふたりは四つんばいになって岩の間をはいあがりました。神様が共におられることを知っていたので、怖くはありませんでした。

考えてみよう：神様はどうして、たったふたりの兵士を大勢の敵に立ち向かわせようと考えられたのでしょうか？神様に信頼してしたがうことを選ぶとき、神様が私たちのためにできないことは何もないというのは、もうすでにはっきり示されていたのではないのですか？

木曜日

ヨナタンと武器を運ぶ青年は、敵の陣地にはいあがって行きました。敵の見張りたちは、最初にふたりを見たとき、笑いものにしました。ところがふたりが上に着いたとき、何が起こりましたか？サムエル記上 14:13。

ヨナタンと武器を運ぶ青年は、ふたりだけだったのでしょうか？いいえ！天使たちがそこにいて、彼らを助けていたのです。地は、まるで兵隊たちが馬や戦車でやってくるかのように震えました。14-15 節。

谷の向こう側には、まだサウルと彼の兵士たちがいましたが、その見張り役たちには、おびえたペリシテ人たちがあちら

こちらを駆け回り、お互いに殺し合っている様子が見えました。

見張り役たちは、すぐサウルに報告しました。サウルは、ヨナタンと武器を運ぶ青年がいないことにも気がつきました。

ふたりが戦いをしかけたことを知って、サウルもそれに加わりたいと思いました。しかし、まずは祭司にたのんで、何をするべきかを神様にたずねてもらいたいと思いました。

それなのに、サウルは神様からの答えを待ちませんでした。谷の向こう側ではペリシテ人同士の戦いがますます激しくなって、サウルは彼の兵士たちと共に突撃しました。すると、だれが彼らに味方しましたか？ 19-22節。

サウルはすべての兵士に、食事をしないで敵を追いかけるようにと命令しました。しかし、ヨナタンはどうしましたか？ 24-27節。

神様が、そこにハチミツをおいたのです。もし兵士たちが少しなら食べてもよいと言われていたならば、彼らは戦いをつづけて敵を完全に打ちのめすことができたでしょう。しかし彼らは、あまりにもおなかがすいて、へとへとになっていました。

サウルの命令について、ヨナタンは何も知りませんでした。ところが、ヨナタンがハチミツを食べたことを知ったサウルは、ヨナタンは死ななくてはならないと告げたのでした。兵士たちは、それが正しくないことだとわかっていました。ヨナタンと武器を運ぶ青年をとおして、神様は驚くばかりの奇跡を起こしてくださいましたが、それは彼らが神様の力に信頼していたからです。兵士たちは、サウルにヨナタンを殺させませんでした。

考えてみよう：この日、実際にイスラエルを救ったのはだれでしたか？ 23節。サウルは、神様が祝福できないようなことばかりやっていました。神様にしたがっていなかったとしたら、一体だれに従っていたのでしょう？

金曜日

サウルは神様に逆らって、自分の計画にしたがうようになっていました。サムエルはサウルを愛していましたから、このことはサムエルをひどく悲しませました。神様もサウルを愛しておられました。そこで、神様はサムエルに、サウルがご自分の言いつけにしたがうことを選ぶ

チャンスを、もういちどだけ与えようとおっしゃいました。

残酷で邪悪な〔とても悪い〕アマレク人は、神様を憎み、チャンスがあればいつでも神様の民に害を加えていました。また、アマレク人たちが決して変わらないことも、神様は知っておられました。今こそ、イスラエルの民はアマレク人を滅ぼすべきでした。彼らの持ち物や財産も、とっておいてはいけませんでした。

サウルは、自分が何をするべきかを正確に知っていました。そこで、20万人以上もの兵士を率いてアマレク人との戦いに行き、イスラエルは勝利しました。彼は喜びいさんで、兵士たちと行進しながら帰ってきました。

ところが、神様は喜んでおられませんでした。どうしてでしょう？サムエル記上15:10-11。

次の朝早く、サムエルはとても悲しい気持ちで目を覚ましました。サウルと話さなくては、と思いました。まだサウルと会う前でしたが、サウルがまたもひどく神様に逆らうことをしたと告げる声を、サムエルは聞いていたからです。自分のしたことが間違っていたことを、サウルは認めたでしょうか？それとも、また言い訳をしましたか？13-28節。

考えてみよう：王様になる前から、サウルはなんでも自分の思いどおりにしたがり、よく考えもしないで行動する習慣がありました。王様になってしばらくの間は謙遜で従順でしたが、少しずつ、以前の習慣にもどっていったのでした。そのほうが楽なのでしょうか？

もっと学ぼう！

★サムエル記上 11-15章

★人類のあけぼの 59章（P. 276）-61章

一体どこから来たの？

エイミー・シェラード

「ねえ、約束を忘れないでよ!」チャールズと妹のネルは、お母さんにすり寄りながら念をおしました。もう寝る時間でした。お母さんが、昔この国で起こったある出来事についてのお話をしてくれると約束していたのです。

当時は、家族ぐるみで遠くの新しい場所へ移り住むのがはやっていた頃で、そういった場所には、危険な動物や、恐い人たちが近くにいることだってありました。

お母さんが話してくれたのは、他のだれよりも遠い遠いところに移り住んだ２組の家族のことです。彼らは家族どうし仲のよい友だちでしたので、お互いの小屋を近くに建てました。

あまりたくさんの物を持って行くことはできなかったのですが、作物を植えることができるようになるまでは、食糧が必要だとわかっていました。もうじき寒い季節になりそうだったので、冬が終わるまでは十分に足りるぐらいの食糧を持って行ったつもりでした。ところが、気をつけていたはずなのに、冬が終わる前に食糧が底をつきそうになりました。そこで、男たちが食べ物を売っている町まで行って、食糧を買ってくることになりました。

食べ物を買いに行く前に、このあたりに強盗が出るということをきいたので、男の人たちは家族をおいていくのが心配でなりませんでした。話し合った結果、男たちが出かけている間、女と子供たちはひとつの小屋にいっしょにいたほうがより安全だろうということになり、そうすることにしました。

男の人たちが出かけた最初の夜、２組の家族はいっしょに礼拝をしてから、早めに寝ることにしました。小屋はとても小さかったのですが、子供たちは床の上で毛布をかぶり、寄りそって寝るのをおもしろがりました。次の日の朝、母親のひとりが、もうひとりの母親にいいました。「ねえ、ずっとだれかに見られてるような気がするんだけど。」ふたりの母親たちは外に出て、見渡せる限りあたりを見回しました。でも、だれもいないのです。

朝ごはんの後、ふたりの年長の子供たちが、小屋の裏でかっているニワトリにえさを持って行きました。ところが、すぐ

に小屋へ走ってもどってきました。「見て、何がぼくたちのあとをついてきたと思う!」彼らは大声を上げました。７匹もの大きな人なつっこい犬たちが、彼らのあとをついて小屋に入ってきたのを見て、みんながどれだけ驚いたか想像できますか?

「あら、犬じゃないの!どこからきたのかしら?」みんな知りたがりました。

「わかんないよ!気がついたら、そこにいたんだもの!それから、ぼくたちのあとをついてきたんだ!」とふたりの子供は言いました。「それにしても、おとなしくて、よくしつけられているわねぇ。」

すぐにみんなで犬をなで始め、母親たちは犬たちに食べ物をあげました。それから犬たちは、暖炉の前の床に体をのばして眠ってしまいました。ところが暗くなると、クンクン鳴いたり、吠えたりして外に出たがるのです。小さな小屋はもう満員状態でしたので、母親たちは犬たちを外に出してやりました。そのとたん、たくさんの人の走る足音が聞こえました!それから、夜の間はずっと静かでした。

朝になって、母親たちが見たのは、小屋の周りにあるたくさんの人間の足跡でした。みんなは昨日の走っていく足音を思い出し、犬たちがその人たちを追い払ったのだということがすぐにわかりました。

「それで、その大きくてきれいな犬たちは、どうなったの?」チャールズとネルは知りたくてしょうがありません。

「その後は、だれも犬たちを見なかったのよ。」

「じゃあ強盗たちは?」ふたりはまた聞きました。

「強盗も二度と現れなかったの」と、お母さんは言いました。

「男の人たちが食料を持って帰ってきてから、家族は犬たちがとつぜん現れたことや、その時に起こったことを話したの。父親たちは、どれだけ感謝したことでしょうね!これはきっと、小屋にいる家族を守るために、イエス様が犬をつかわしたんだろうって、みんなはそう思ったのよ。」

「もちろんそれはイエス様だよ!」チャールズとネルは声をそろえて言いました。ふたりはベッドに飛びのる前に、ひざまずいてお祈りしました。イエス様が自分たちのことも、同じように心にとめてくださいますように、と。

第11章

神様が新しい王を選ぶ

暗唱聖句

「教訓を聞いて、知恵を得よ。これを捨ててはならない。」
箴言 8:33

日曜日

アマレク人との戦いに勝って、サウルは満足していました。けれども、サムエルは悲しんでいました。とても悲しかったのです！サウルに話しに行かなくては、と思いました。

サウルはサムエルに会うと、自分は神様の言いつけどおりにしたと言いました。本当でしょうか？いいえ、そうではありませんでした！

神様は、アマレク人の持ち物もすべて滅ぼしなさいとおっしゃったのです。ところが、サウルの兵士たちは、たくさんの家畜を滅ぼさずに残しておきました。兵士たちは、神様にささげるための家畜をとっておいたのだと、かれは言い訳しました。おそらく兵士たちは、敵から奪った家畜をささげれば、自分たちの家畜をささげなくてもすむだろうと思ったのでしょう。

サムエルは、神様が必要とされるのは動物ではないことを、サウルにわからせようとしました。神様は服従〔したがうこと〕を求められるのです。服従は他の何よりも重要なことでした。いまだにサウルがしたがうことを学んでいないので、神様は別の王様を選ばなくてはなりませんでした。サムエル記上 15:22-23。

そのことは、サウルをおびえさせました。すぐに彼は自分が罪を犯したことを認めましたが、またも言い訳をしてしまいました。24-25節。

サムエルが帰ろうとすると、サウルは

死にものぐるいになりました。サムエルの着物をつかんで引きもどそうとしたのです。着物が裂けたのを見て、サムエルは何と言いましたか？ 27-28 節。

ラマにある自分の家へもどったサムエルは、ひじょうに悲しんでいました。サウルのことばかり考えていました。サムエルはサウルを愛していて、彼が神様にしたがうことを選んでほしいと願っていたからです。神様も悲しんでおられました。しかし神様は、サウルが変わることはないのを知っておられました。神様は、サムエルになんとおっしゃいましたか？サムエル記上 16:1。

考えてみよう：どんなことよりもまず、神様は私たちに、サタンから離れて自由で幸せになってほしいと願っておられますよね。したがうことがどれだけ大切かということを教えるために、あなたの両親が助けてくれるのは、喜ばしいことだと思いませんか？

月曜日

はじめサムエルは、神様が自分にたのんだことを行うのを恐れました。彼は、神様になんと言いましたか？神様はどうお答えになりましたか？サムエル記上 16:2-3。

サムエルは、いつでも神様にしたがうよう学んできましたし、神様がいつも彼を守ってくださると信じていました。彼がベツレヘムにやってくると、町の長老たちは緊張しました。サムエルは、彼らに何と言ったのですか？ 4-5 節。

エッサイは、特別な犠牲をささげるのに、なぜ自分と息子たちが呼ばれたのか、ふしぎに思ったことでしょう。しかしサムエルに呼ばれたのですから、行くしかありません。エッサイは、いちばん下の息子に羊の番をさせ、7 人の息子たちとともに行きました。

犠牲をささげた後、特別な食事をする前に、サムエルはエッサイの息子たち一人ひとりに目を注ぎました。最初は、背が高くて顔だちの美しい、長男のエリアブに注目しました。エリアブのりっぱな外見は、サムエルにサウルを思い起こさせました。彼を見たとき、サムエルは何を考えたでしょうか？でも、神様は何とおっしゃいましたか？ 6-7 節。

ここで神様が言われたことは、私たちに

とっても重要です。エッサイのどの息子もよさそうでしたが、神様は同じことを言いつづけました。10節。

サムエルは、困ってしまいました。次の王様は、エッサイの息子のひとりである、とおっしゃったのです。何かが間違っていたのでしょうか?どうして彼らの中のひとりも選ばれなかったのでしょう? 7人目の息子を見てから、サムエルはエッサイに何とたずねましたか? 11節。

考えてみよう：私たちは時々、かわいい人やかっこいい人、頭の良い人が特別だと思うことはありませんか?その人がもしいじわるで、わがままだったらどうでしょう?人間を特別な存在にするのは何でしょうか?思いつくことをあげてみてください。

火曜日

神様はサムエルに、次の王様になる人物はエッサイの息子たちの中にいるとおっしゃいました。それなのに、ひとりずつサムエルの前を通りすぎるたびに、神様は「いや、この人ではない」と言われます。あとでサムエルは、もうひとり息子がいることを知って、その人を呼びに行かせます。彼の名は、ダビデといいました。

家族の羊の世話をするのが、ダビデの仕事でした。決して楽な仕事ではありません。1匹でもいなくなったりしないように、気をつけなくてはいけません。また、猛獣におそわれないように見張りもします。

神様から特別な才能を与えられていたダビデは、羊の世話をしながら、その才能をふんだんに使って楽しんでいました。来る日も来る日も、丘や木々や夜空の星、他にも神様のつくられたいろんなものを見ながら、彼は詩を書いて歌を作り、ハープを弾きながら歌うのでした。

ダビデの書いた歌は「詩篇」と呼ばれています。私たちが読んでいる聖書の詩篇には、ダビデの作った歌がたくさんのっています。野原では、好きなだけ歌い、ハープも好きなだけひくことができました。ダビデの歌声は、どんなに美しかったことでしょう!きっと、ハープもじょうずにひいたことでしょう。

ダビデを見つけたエッサイの使者は、サムエルが会いたがっているから、すぐに来るようにと彼に伝えました。ダビデは驚いたことでしょう。どうして預言者であり、さばきづかさである方が自分と話をしたいのか、想像もできませんでした。

少したってから、ダビデはサムエルの

前にうやうやしく立っていました。ダビデを見たサムエルに、神様が何とおっしゃいましたか？それから、サムエルは何をしましたか？サムエル記上 16:12-13。

考えてみよう：サムエルはダビデに油を注ぎました。もしあなたがダビデだったら、どう思ったでしょうか？

水曜日

エッサイの家族の者は、だれかが油を注がれるときには特別な理由があることを知っていました。しかしサムエルは、自分がなぜベツレヘムに来たのかを、彼らにも他のだれにも話すことなく、ダビデに油を注いだ後ラマへ帰ってしまいました。

ダビデは羊飼いの仕事にもどりましたが、神様が将来、ある特別な働きのために自分を選んでくださったのだと知りました。彼は、これまでよりもさらに祈って、一生けんめい羊の世話をしました。神様がのぞんでおられる大切な働きの準備をしたかったからです。もしあなたがそこにいたら、ハープをひきながら歌う、ダビデの神様への賛美と信頼の美しい歌をきくことができたでしょう。

ダビデが羊と自分を守るために持っていたのは、羊飼いの杖と石投げだけでした。これらの武器を使って、どんな猛獣でもやっつけたり、追い払ったりできました。ある日、1頭のライオンがやってきて、小羊をくわえて逃げようとしました。ダビデは杖と石投げを使い、小羊をライオンから無事に助け出したのでした。ライオンは彼を殺そうと向かってきましたが、ダビデは逆にそのライオンをやっつけてしまいました。またある時は、クマを退治したこともありました。

サムエルがダビデに油を注いだ後、主の霊がダビデに下ったと、聖書は言っています。サムエル記上 16:13。

ダビデは勇敢でしたが、もし神様の助

けがなかったら、自分の力だけでライオンやクマを倒すことはできなかったことを知っていました。

ダビデの作ったふたつの賛美歌を読んでみてください。詩篇 28:7; 詩篇 23。

***考えてみよう：**ある日、昔ダビデが羊の番をしたその場所で、光り輝く天使の楽団が羊飼いたちに歌います。天使たちは何について歌いましたか？ルカ 2:8-14。*

木曜日

ダビデが神様に信頼し、したがうことを選んでいたので、聖霊はダビデを助けつづけました。しかし、サウルには何が起こっていましたか？サムエル記上 16:14-15。

神様の天使たちは悪い者なのでしょうか？いいえ、そうではありません！では、悪天使たちはどこからやってくるのでしょう？サタンからです！もし、神様が悪天使たちにサウルを悩ませる許可を与えなかったら、サタンはおそらく「あなたは不公平じゃないか！サウルは、このサタンに従うことを選んだのだ！彼は私のものだから、私が彼を誘惑できないような邪魔はしないでくれ！」と言ったでしょう。

サタンは絶対に、神様を不公平だと言うことはできません。神様は、サタンの悪天使たちが私たちを誘惑するのを止めませんし、彼らがサウルを誘惑するのも止めませんでした。そして、悪天使にしたがうことを選んだのは、サウル自身でした。

神様はいつでも公平であられます。神様は、私たちを安全で幸せなまま守ってあげたいと強く願っていても、私たちを無理やりご自分にしたがわせるようなことは絶対なさらないのです。

今や、サウルが考えられることは、自分がいつの日か王様でなくなる時がくるということでした。その日がいつやってくるのか心配で、いつもびくびくしていました。サウルは、したがわなかったことを心から反省しないで、自分はアマレク人に勇敢に立ち向かったのだから、お言葉どおり正確にしたがわなかったことぐらい神様が気にするべきではない、と考えるようになりました。こうして、サウルはますます反抗的になっていきました。

時には、狂ったようになることもありました。また、ある時はとても落ちこんで、だれとも話さないこともありました。そこで、サウルの召使いは名案を思いつきました。それは何でしたか？ 16 節。

サウルは、それに賛成しましたか？ 17 節。神様は召使いのひとりに、王様の心を落ち着かせるのに、だれが一番ふさわしいかを思い出させました。それはだれでしたか？この召使いが、その人物について言った 6 つの事を見つけられますか？

***考えてみよう：**もしだれかが、友だちや先生にあなたのことを聞いたとしたらどうでしょう？彼らは、あなたについてなんと言うでしょうか？イエス様を愛する人？従順な人？明るい人？親切で頼もしい人？*

金曜日

使いの者がやってきて、ダビデに、サウル王のためにハープをひき、歌をうたってほしいと言ったとき、エッサイの家族全員が驚いたにちがいありません。

すぐに、ダビデはハープと贈り物をたずさえて、サウルのもとへ向かいました。サムエル記上 16:20。

サウルは、ダビデのハープをきくのが好きでした。かれの不安や怒り、ふさいだ気持ちを忘れさせ、気分をやわらげてくれたからでした。

今度は、23 節を読んでください。それがどういう意味か覚えていますか？悪霊が神様から来ることはありますか？すべてのことは、それが人に降りかかることを神様がおゆるしにならなければ、起こりえないということを覚えておかなくてはなりません。もし私たちが、神様に信頼してしたがっているのなら、何が起ころうとも怖がらなくてよいのです。たとえ、それが死ぬことであったとしてもです。それなのに、サウルは自分のやりかたを選ぼうとしていました。当然、神様はサウルがするままにさせました。なぜなら、神様は私たちが従うように強制することもおできになりますが、そうはなさらないからです。そういうわけで、神様にとって悲しいことでしたが、悪天使たちがサウルを悩ませることをおゆるしになったのです。神様は、私たちから選ぶ自由をとりあげたりすることは絶対になさいません。

ダビデは多くの時間をサウルとすごしていましたが、時どき、自分の家にかえしてもらえることもありました。羊の番をしながら、ダビデはサウルのことを考えました。彼は、悪天使たちがサウルを悩ましていて、それでサウルは幸せでないことを知っていました。ダビデは、自分のハープの音色と賛美の歌声で悪天使たちを追い払うことができるのを、うれしく思いました。

考えてみよう：あなたと同じように、ダビデは幼い時から、神様に信頼し従っていました。彼は知りませんでしたが、イエス様の特別な働き人になるために毎日学んでいたのでした。

もっと学ぼう！

★サムエル記上 16 章
★人類のあけぼの 62-63 章

ラスカルと穴—パート1

エイミー・シェラード

ラスカルは、ワクワクしながら流し台のそばの床におすわりしていました。短いしっぽをうれしそうに振って、ホリーが自分のお皿にえさを入れ、おまけにトーストをふた切れのせてくれるのをじっと見ています。ホリーは、ほほ笑みながらラスカルをなでてあげましたが、実はおとなりのクラークおばさんの事を考えていました。

ホリーが台所のドアの外にえさ入れをおいたとき、おとなりの家を見て、クラークおばさんの小さな犬のジガーのことを思ったのでした。ジガーがとつぜんいなくなってから、もう３週間半もたっています。クラークおばさんは探したり、張り紙をしたり、心当たりのありそうな人たちみんなに、ジガーを見なかったか聞いてまわりました。ジガーがいなくて、おばさんがどんなにさびしい思いをしているか、ホリーにはよくわかりました。

「ジガーを見つけてあげられたらな。」ラスカルがえさの上にあるトーストを食べ始めるのを見ながら、ホリーは独りごとを言いました。ラスカルだって、かわいいジガーがいなくてさびしいに決まっています。

ラスカルはすぐにえさを食べ終えて、お皿をきれいになめました。ラスカルがふたつのトーストを一気にくわえようとする姿を見て、ホリーは笑いました。ひとつのトーストをくわえて、もうひとつを拾おうとするのですが、口をあけたとたんに最初のものを落としてしまうのです。結局、ホリーがふたつのトーストをあわせて、ラスカルの口に入れてあげました。

「ねぇラスカル、地面はこおっているのに、いったいどこに残った食料を埋めるつもりなの?」ホリーはたずねました。彼女は、ラスカルが時々食べ物を埋めておいて、あとで掘り起こして食べることがあるのを知っていました。見ていると、ラスカルは急ぎ足で生け垣のはしをぐるりとまわって、さらに空き地をこえてそのとなりにある畑へと向かっていきます。寒くてホリーはがたがた震えて

いましたが、ラスカルが畑のすみで立ち止まるまで待っていました。すると、ラスカルは頭を下げていき、ついには地面に頭がすっかり隠れてしまいました。

「あれ、何をしているんだろう?」ホリーはふしぎでなりません。雪の上の足跡を見れば、ラスカルが何度もそこに行ったことにまちがいはありません。

ホリーはお皿洗いをしないといけなかったのですが、それはあとですることにしました。ホリーがやって来ると、ラスカルは走りよってきました。喜んで彼女のまわりをとびはね、さっきの畑のすみへ走って行きました。ホリーはあとをついていきましたが、とつぜん立ち止まりました。ラスカルが走って行ったところは、ホリーのお父さんが近所の子供たちに、絶対近づいてはいけないと注意した場所だったのです。畑のすみには古い井戸があって、一部は土を入れてふさいでいました。土でおおわれてはいるのですが、お父さんはそこに近づくのは危険だと言っていました。

ラスカルはまるで、お願いだからこっちへ来て、とうったえるかのように吠えています。慎重に、慎重に、ホリーはラスカルのほうへ歩いて行きました。近づくにつれ、ラスカルはますます興奮してきます。ここが、食べ物の隠し場所なのでしょうか?ホリーは首をかしげました。

（つづく）

第12章

ダビデとゴリアテ

暗唱聖句

「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエル軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。」サムエル記上 17:45

日曜日

サウルはふたたびペリシテ人と戦っていましたが、そのサウルの軍隊にはダビデの3人の兄たちも入っていました。ダビデは家にいて、羊の番をしていました。

ある日のこと、父のエッサイはダビデに、兄さんたちのところへ行って、彼らがどうしているか様子を見てきてほしいと言いました。サムエル記上 17:17-18。

ひとりの天使がダビデのところへ来て、かれがイスラエルの民を敵から救うことになるだろうと語ったのは、だれも知りませんでした。朝早く出発したダビデは、どうしてそんなことが起こり得るだろうと、首をかしげたかもしれません。

イスラエルの陣地に到着したとき、かれは何をしましたか？ 20-22 節。

ダビデが兄さんたちと話していると、

兵士たちがとつぜん、まるで何かにおびえたかのように敵のいる方向からもどってくるではありませんか。なぜでしたか？ 23-24 節。

4 節から 10 節を読んでみると、ゴリアテがどういう人物だったかがわかるでしょう。彼は、とてつもなく大きい人でした！ 彼の姿を想像してみましょう。

彼は、背が３メートルくらいもある巨人でした。青銅のかぶとを頭にかぶり、魚のうろこ模様のよろいを着ていました。彼のよろいかぶとは、どんな槍も矢も通しません。よろいだけでも、45 キロの重さがありました!また、足には青銅のすね当てをつけています。槍の先だけでも、７キロの重さがありました。サウルもイスラエルの兵士たちも、ゴリアテに恐れをなしていました。24 節。

考えてみよう：小さい７、８歳の子供が大人のそばに立っているのを見れば、ふつうの兵士がゴリアテのそばに立ったときにどう見えたかがわかるでしょう。それはそれは、恐ろしかったにちがいありません！あなただったら、恐れおののいたと思いますか？

月曜日

毎朝毎晩 40 日もの間、巨人ゴリアテは、イスラエル軍の中に勇気のある兵士がいたら、一騎打ち〔一対一の勝負〕をしようと戦いをいどみましたが、みんな震え上がっていました。サムエル記上 17:8,16。

ゴリアテが出した条件は、どのようなものでしたか？ 9-10 節。

サウル王は、この巨人と戦う勇気があって倒すことができた者には、ほうびを約束していました。ところが、挑戦しようと名乗りを上げる人はだれもいません。25 節。

ゴリアテの言葉を聞いたダビデは、耳

をうたがいました。「一体あいつは、自分を何様だと思っているのだ？よくも神をのろい、神の民まで笑い者にしたな！」

ダビデがこのように話すのを聞いた一番上の兄のエリアブは、いやな気持ちになりました。28 節。

実は、エリアブはダビデをねたんで〔うらやましくて憎らしく思うこと〕いました。かれは、サムエルがベツレヘムに来て、ダビデに栄誉を与えたことを忘れていませんでした。エリアブは今でも、預言者から栄誉を与えられるべき者は、弟のダビデではなく自分であると考えていたのです。しかし、ダビデは兄と言い争いをしませんでした。かれは、兄に対して何も悪い事はしていませんでしたし、怒るべきはゴリアテに対してであると、よくわかっていました。29 節。

ダビデが他の何人かの兵士と話してみ

ると、みな同じことを言っていて、彼らは、ゴリアテを倒した者へのサウルの約束のことも教えてくれました。30節。

考えてみよう：ダビデがゴリアテを倒したいと思ったのはなぜですか？かれは、サウルのほうびが欲しかっただけでしょうか？

火曜日

だれかがサウルにダビデのことを話すと、サウルはダビデを呼ばせました。ダビデがサウルに言っていることは、とてもむぼう〔向こう見ず〕で命知らずに聞こえました。「ご心配にはおよびません」とダビデは言いました。「私がゴリアテと戦います！」サムエル記上 17:32。

サウルはダビデを見て、首をふりました。こんな若者が、あの巨人と戦おうだなんて、とても信じられません。サウルは、ダビデに何と答えましたか？33節。

それでも、ダビデはあきらめようとしません。彼はサウルに、ライオンやクマを殺したことを話しました。ただしダビデは、だれが彼を助けてくださったと言いましたか？ゴリアテを倒そうと出ていくダビデを、だれが助けてくださるでしょうか？37節。

とうとうサウルは、ダビデにゴリアテと戦う許可を与えましたが、召使いに命じて、ダビデに自分の武具を身につけさせました。真ちゅうのかぶとや、金属でできたよろいなどです。それからダビデは、サウルの剣をわきにさして出て行きました。

その様子を、みんなが見ていたことでしょう。ところが、それほど遠くへ行かないうちに、ダビデは引き返してサウルのところへ戻ってきました。もちろんみんなは、かれが心変わりして、ゴリアテと戦うのをやめてしまったのだと思いました。それが本当の理由でしたか？39節。

これで楽になりました。ダビデは小川を通りすぎるときに、少し立ち止まりました。なぜでしたか？40節。

ダビデは、少しも恐れずにゴリアテのところへ急ぎます。自分は、神様がしてほしいとのぞんでいることを実行しているだけだと知っていました。

すべての兵士が、かたずを飲んで見守ったにちがいありません。

考えてみよう：ダビデは、神様の民の救いについて天使が話したことを思い出していたかもしれませんね。詩篇 34:7 を読んでください。あなたはこの約束が好きですか？

水曜日

ゴリアテは、ついに自分と戦う人があらわれたのを見ました。しかし、近づいてくるダビデを見て、ゴリアテは目をうたがいました。「イスラエルのやつらは、この俺さまをばかにしているのか?」と思ったのです。自分に向かってくる者は若くてチビだし、持っている武器は、杖と石投げだけではありませんか!サムエル記上 17:41-42。

怒った巨人が異教の神々の名によって呪ったり誓ったりする声は、みんなに聞こえるほどでした。43-44 節。

次に彼らは、ダビデが澄んだ力強い声でゴリアテに答えるのを聞きました。45 節。

ダビデは巨人とすべての人に、自分がゴリアテや異教の神々に何の恐れも抱いていないということを知ってほしかったのです。ゴリアテがダビデにしようとしていたことが、そのまんまゴリアテの身に起ころうとしていました。何よりも、神様が剣や投げやりを必要とされないことを、すべての人が知ることになるでしょう。神様は、だれよりも何よりも強いおかたなのです。神様には、どんな敵も勝ち目はありません。46-47 節。

ゴリアテは、カンカンに怒っていました。かぶとを上に押し上げ、野獣のようにダビデに突進してきました。

勇ましくゴリアテに向かっていきながら、ダビデは石を 1 個、注意深く石投げに入れました。石投げはビュンビュンと音をたてて回り、どんどん速くなっていきます。それから石はものすごい速さで空中を飛んで行き、ダビデのねらい定めたとおり、ゴリアテの額に命中しました。ゴリアテは立ち止まり、まるで目が見えなくなったかのように両手を前に伸ばしています。ゴリアテは、よろめきました!そして大きな木が地面に倒れるように、前のめりに倒れたのでした。48-49 節。

ですが、ゴリアテはまだ死んではいません。ダビデは、一瞬たりとも無駄にしませんでした。すぐさまこの悪い巨人の上に乗り、彼の大きな剣を抜き出しました。50-51 節。

考えてみよう:ねらったところへ石が飛んで行くように、天使たちが助けてくれたと思いますか?ダビデは、神様が助けてくださったことを知っていたと思いますか?このいばった巨人が大きくて強かったので、

神様は困りましたか？箴言 16:18 には、なんと書いてありますか？

木曜日

ペリシテ人もイスラエル人も、ダビデがゴリアテを倒したことに大変驚きました。敵も味方も、ゴリアテが殺されるなどとは思ってもみなかったのです。だれもが、殺されるのは巨人ではなく、ダビデのほうだろうと思いこんでいました。

今や、両軍から叫び声があがっています。ペリシテ人たちが叫んでいたのは、急に恐ろしくなったからです。そして彼らは、いちもくさんに逃げ出してしまいました。イスラエル人はおたけびをあげながら敵を追いかけ、逃げている多くの者を捕らえて殺しました。

陣地にもどってきたイスラエル人は、次に何をしましたか？サムエル記上 17:53。

サウルは、ダビデが勇敢にゴリアテに立ち向かっていくのを見ました。かれは、ダビデのことをもっと知りたくなりました。すでにダビデのことを知ってはいましたが、かれがどういう人で、どこから来た者なのか、気にかけたことはなかったのです。軍の司令官であるアブネルにダビデの事をたずねたとき、アブネルは何と言いましたか？ 55-56 節。

戦いが終わった後、アブネルはダビデを、サウル王のところへ連れて行きました。57-58 節。

サウルの息子のヨナタンは、サウルがダビデと話すのを聞き、感動のあまり心がおどりました。なぜなら、かれもダビデと同じように神様を愛し、信頼していたからです。神様はヨナタンをとおして、おどろくような事をしてくださったこともありました。彼が武器を運ぶ者といっしょにがけを登っていたとき、神様は天使をつかわして彼らをお助けになったので、敵はやぶれて逃げて行ってしまいました。その様子はまさに、ダビデがゴリアテを倒したときと同じでした。

父のサウルがダビデを自分の兵士としてそばにおくつもりだと聞いたとき、ヨナタンはダビデと知り合いになるのが待ち遠しくてなりませんでした。互いに親友になれたらいいなと思ったかれは、期待に胸をふくらませていました。サムエル記上 18:1-2。

考えてみよう：他の人が見てすばらしいと思うことをふたりの人がしていた場合、互いにねたみ合うようになることがよくあります。ヨナタンがねたむことなく、ダビデのことを好きでいられたのはなぜですか？だれが、ふたりの心の中に住んでおられたと思いますか？

金曜日

ゴリアテは死にました。サウルはダビデに、自分のところにとどまってほしいと言いました。それを聞いたヨナタンは、とても喜びました。自分とダビデは、特別な友だちになれるだろうと思っていました。ふたりとも神様を愛し、信頼し

ていたからです。

ゴリアテを倒したことでダビデが国の英雄〔ヒーロー〕になることも、ヨナタンにはわかっていました。彼はどのようにして、自分がダビデをねたんでないことを示しましたか？サムエル記上 18:4。

ゴリアテを倒し、今や家族の一員のようになったダビデこそ、神様がお選びになった次の王様だとは、サウルは夢にも思いませんでした。サウルはダビデを信頼していましたし、これほど勇気のある忠実な兵士がいることをとても喜んでいました。サムエル記上 18:5。

ところがある日のこと、サウルとダビデが、ペリシテ人との戦いから帰って来たとき、ダビデに対するサウルの気持ちを変える出来事が起こりました。6-7 節。

とつぜん、「ねたみ」という恐ろしい、大きなみにくい悪魔が、サウルの心に入ってきました。サウルよりもダビデのほうが、人気があるのは明らかでした。その日から、サウルは何をしましたか？ 8-9 節。

考えてみよう：神様が、私たちの選ぶ力をとり去ることは決してありません。そうではありませんか？しかし、ねたむことを選ぶとき、あなたはサタンが入って来れるように自分の心のとびらを開いているのです。そして、しっと〔ねたむこと〕深い人が幸せになることは絶対にありません。今すぐイエス様にお願いして、あなたが決して人をねたむことがないように助けてもらいましょう。

もっと学ぼう！

★サムエル記上 17 章、18:1-9

★人類のあけぼの 63 章、64 章

ラスカルと穴—パート2

エイミー・シェラード

ラスカルは、畑のすみにある穴をのぞきこんでいます。そこはホリーのお父さんが、危ないから遊んではいけないと言った場所でした。

ラスカルはえさを隠すための新しい場所を見つけたのかな、とホリーは思いました。

ホリーが注意しながらその穴に近づくと、ラスカルはますます興奮してきました。とつぜん、ラスカルの吠える声に混じって、小さなクンクン鳴く声が聞こえたような気がしました。すぐにホリーは、ラスカルが穴から、木でおおわれた古い井戸の中をのぞきこんでいるのだとわかりました。彼女はひざをついて、ゆっくりゆっくりその穴のほうへはって行きました。すると、さっきの小さなクンクン鳴く声が、キャンキャンと興奮した声に変わったのが聞こえました。

「ああ、ジガー!」ホリーは大声で叫びました。「かわいそうに、ジガー、すぐにもどるから待ってて!」

ホリーは穴から注意ぶかくはってもどり、全速力でお兄さんのボブを探しに家へ走りました。ホリーは彼の腕をつかんで「早く!」と言いました。「私、ラスカルがトースト2切れをある穴の中に落とすのを見たの。それって畑のすみっこにあるあの古い井戸なんだけど、ジガーがそこにいるの!」

「それはかわいそうに!」と叫んだボブは、上着をつかむと、井戸へと急ぎました。

そこに着くと、ボブはホリーに「ここにいなさい」と言いました。「お兄ちゃんが腐った木のふたをこわして、安全に下にたどりつけるようにするから。」

ちびのジガーは、うれしさのあまり暴れています。ボブは出来るかぎり手をのばしてはいますが、それでもジガーにあと少しだけ届きません。

「もし勇気があるなら・・・」ボブはホリーに言いました。「僕が足をもっていてあげるから、おまえは下に手をのばしてジガーをつかまえるんだ。そうしたら、いっぺんに引き上げるから。」ホリーは迷いました。でも、お兄さんを信頼してそうすることにしました。ホリーが注意ぶかく縁から穴へ入っていく間、ボブは彼女の足をしっかりとつかまえていました。「うわ、ここ臭いわ!」ホリーはボブに言いました。井戸のふたの縁からほこりや土がポロポロとふってきてホリーの髪に入るし、顔や服にも落ちてきましたが、彼女は気にとめませんでした。

「たくさん骨とかパンくずが落ちてるけど、ラスカルがさっき落とした2枚のトーストは見当たらないわね。」喜ぶジガーに手をのばしながら、ホリーはボブに言いました。「もう少しよ・・・あと、もうちょっと・・・よし、つかまえたわ!さあ引っ張って!」ホリーはボブに言いました。まもなく、ホリーとジガーは穴から抜け出ました。2匹の犬は喜んでキャンキャン鳴いています。

「ジガーが見つかったわ!ジガーを見つけましたよ!」ホリーは、ボブといっしょにクラークおばさんの家へ走りながら叫びました。裏口のドアが勢いよくあきました。「ああ、ありがとう!本当にありがとう!でも、いったいどこで・・・?」

ジガーがクラークおばさんの顔を犬流のキスでなめまわしている間に、ホリーとボブは一気に話しました。ラスカルはうれしさのあまり、ほえたりキャンキャン鳴いたりしています。それからクラークおばさんがジガーに水をやると、ジガーは飲んで、飲んで、飲みまくりました。

「つまり、ラスカルはいつもジガーに食べ物を持って行ってあげてたのね!」ラスカルの顔を見つめながら、ホリーは言いました。「神様は、人間と同じように、動物たちのことも見守ってくださっているのね!」

(終わり)

第13章
ねたみの恐ろしさ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「世には友らしい見せかけの友がある。
しかし、兄弟よりもたのもしい友もある。」
箴言 18:24

日曜日

ダビデがゴリアテを倒したので、サウルは迷わず、ダビデを軍隊の偉い地位につかせることにしました。

ところが、人々が自分よりもダビデを好きになっていくのを見たサウルは、どんな気分になりましたか？サムエル記上 18:8-9。

今や、サタンの霊はこれまで以上にサウルの心を占領していました。ですからこんどは、ダビデのハープや歌も、助けになりませんでした。いつしかサウルは、ダビデを抹殺する〔消し去る〕ことしか考えられなくなりました。サウルは何をしましたか？ 10-11 節。

サウルは恐れおののいていました。神様はダビデを祝福し守ってくださるのに、サウルを祝福し守ることはできなくなっていたからです。12 節。

どうして、こうなってしまったのでしょう？神様がサウルから離れたのですか？それとも、サウルが神様から離れたのですか？どちらでしょうか？

今やサウルは、かれの兵士の中でも最も優秀で、最も忠誠なダビデを恐れています。そこで、サウルは何をしましたか？

13節。

考えてみよう：神様はサウルに、ご自分に信頼して従うことを選ぶチャンスを何度もお与えになりましたか？こうなってしまっても、サウルはまだ正しい選びをすることはできたはずでしょうか？はい、できるはずでした！神様はサウルを愛しておられましたが、ご自分を愛してしたがうよう、だれかに強制なさることはありますか？

月曜日

サウル王は、最もすぐれた兵士のひとりであるダビデを殺したいと思っていました。そして、ダビデはそれを知ることになります。しかしダビデは、神様が自分を守ってくださることも知っていました。そして、サウルが自分のことをどう思っているかをわかっていてもなお、ダビデはサウルに忠実で、神様に信頼しつづけたのでした。サムエル記上 18:14。

サウルは、そのことを感謝すべきでした。しかし感謝するどころか、どう思いましたか？イスラエルの人々は、どう思いましたか？ 15-16節。

サウルのねたみは、大きくふくらむ一方でした。彼が他の何よりも望んだのは、どうにかしてダビデの命をとることでした。しかし、そのためには、ひじょうに注意ぶかく行動する必要がありました。人々は、ダビデのことが大好きでした。ですからサウルは、自分がダビデを殺したいと思っていることを知られないような方法で、実行しなければなりませんでした。一番良いと思った方法は、敵との戦いでダビデを死なせることでした。

またサウルは、もうひとつの計画もたてました。娘のひとりをダビデと結婚させれば、彼女がダビデを殺すための計画の手助けをしてくれる、というものです。ところがサウルの娘は、サウルを手助けするどころか、ダビデを助けたのでした。愚かなサウルは、かえって自分自身をますます苦しい立場に追いこんでいきました。そうです。もっとも恐るべき敵は自分自身だったのです。28-29節。

とうとうサウルは、自分のしたいことを隠そうとするのをやめました。召使いたちとヨナタンを呼び集めてから、かれは何と言いましたか？サムエル記上 19:1。

ヨナタンは動揺したことでしょう。自分の父親が、大切な友人を何の理由もなく殺そうと計画しているのです。すぐにヨナタンは、ダビデに警告しなくてはいけないと思いました。それから彼は、父親を説得するつもりでした。2-3節。

次の日、ヨナタンはサウルと話し、ダビデがどんなに忠実であったか、また主がどれほど彼を祝福しておられるかを思い起こさせました。ヨナタンはおそらく、ダビデがサウルの義理の息子であることも覚えるようにうったえたことでしょう。サウルはヨナタンに同意しましたか？ 4-6節。

考えてみよう：ヨナタンは、真の誠実な友でしたか？ダビデは、神様に信頼していましたか？

火曜日

ヨナタンは父親と話した後、ダビデはきっとこれから、サウルに殺される心配をしなくてすむようになると思いました。彼はそう言ってダビデに安心させ、ダビデは以前と同じように、サウルの手伝いをするために戻りました。サムエル記上 19:6-8。

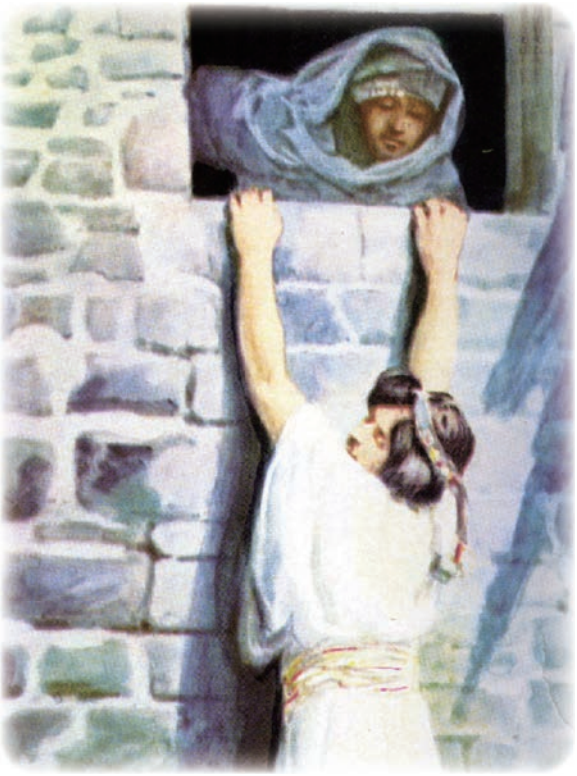
しかし、サウルの心の奥深くでは、何も変わってはいませんでした。憎しみとねたみがまだ心に残っていて、むしろこれまでよりも大きくなっていました。召使いは、サウルが苦しんでいることを知っていたので、ダビデをつかわしてハープをひかせ、サウルを落ち着かせようとしました。この時は効果がありましたか？ 9-10 節。

サウルの娘であり、ダビデの妻のミカルは、何が起きているのかを理解しました。彼女はサウルの手助けをしましたか、それともダビデを助けましたか？ 11—12 節。

サウルがしようとしていたことについてのミカルの警告〔気をつけるよう知らせること〕は、正しいものでした。ミカルのおかげで、ダビデはあわやというところで逃げることができました。それから彼女は、ダビデを捕らえるためにサウルが送った使者たちをある仕掛けでごまかして、うそを言いました。13-14 節。

サウルはますます怒っています。彼は使いの者たちに、ベッドごとでも何でもとにかくダビデを捕らえろ！と言いました。ミカルが彼をだましたことに気づいたとき、サウルは彼女に向かってがみがみと文句を言いました。彼はもうこれまでになかったほどに、ダビデをこの世から消そうという決意に燃えていました。逃げたその夜から、ダビデはサムエルといっしょに暮らしているということを聞きつけたサウルは、ただちにダビデを捕らえさせるための使者たちを送りました。しかし神様は、使者たちがダビデに危害を加えないようになさいました。３度も使者たちをつかわした後、サウル自身も出かけて行きました。それでも神様がダビデを守ってくださったので、サウルは彼を殺すことができませんでした。

考えてみよう：この時点でダビデは、サウルが自分を殺そうとするのを止められるものは何もないと悟りました。ダビデは、神様に信頼しつづけようとしていましたか？あなたなら、神様が守ってくださると



水曜日

ダビデはサムエルのもとを去って、親友であるヨナタンに会いに行きました。なぜサウルが自分を殺そうと決めたのかを知りたいと思いました。サムエル記上 20:1。

ヨナタンは、まず息子である自分に話さずに、サウルがそんな恐ろしいことをするはずはないだろうと思っていました。彼はダビデに、心配する必要はないといって、できるだけ安心させようとしました。2 節。

しかしダビデは、ヨナタンと自分が親友であることをサウルは知っているので、ヨナタンには本当のことを言わなかったのだと思いました。そこで、どちらの言い分が正しいかを突き止めることにしました。ふたりは、どのような計画をたてましたか？ 3-7 節。

それからふたりは、ヨナタンと父親との間に起こったことをダビデに知らせる方法の打ち合わせもしました。新月の祭りの後に、ヨナタンは少年といっしょに野原へ出かけ、弓で矢を射る練習をすることにしました。その間、ダビデはすぐ近くに隠れていて、ヨナタンが少年に話すことを聞いて、何が起きたかを知るというわけです。それからふたりは、たとえ何が起ころうとも、互いに真実の友でありつづけようと、真剣な誓いを交わしました。

新月の祭りの初日、食事の席にダビデがいないのは、何かやむをえない事情が

あるからだろうとサウルは思っていました。ところが、ダビデが 2 日目にも姿を現さなかったので、サウルは理由を知りたがりました。ヨナタンは、故郷に帰ってもよいとの許可をダビデに与えたと答えました。するとサウルは、息子に向かって怒り出しました。31-33 節。

ヨナタンはショックを受け、ひどくうろたえました。結局、ダビデの言ったとおりでした。そして彼は、すぐに食卓を離れました。34-35 節。

次の朝、ヨナタンと少年は野原へ出かけました。ダビデは近くに身をひそめて、耳をすましています。ヨナタンが少年に言ったことを聞いたとき、ダビデの心は沈みました。新月の祝宴で何が起こったかを悟ったからです。39-42 節。

このふたりの友だちは、いつかまた会える日がくるのかどうか、わかりませんでした。ヨナタンは家へもどりました。ひとり

ぼっちになってしまったダビデは、サウルに見つからないように生きていかなければなりません。

考えてみよう：ダビデはそれでも、神様に信頼しつづけるつもりでしたか？

木曜日

聖書の物語について言えるすばらしい事のひとつは、物語すべてが実際にあったお話だということです。他の多くの物語のような作り話ではありません。聖書の物語は、よい選択〔選ぶこと〕とまちがった選択、また良い人たちでさえまちがった選択をするということを、私たちに語っています。

サタンはダビデをがっかりさせて、彼が以前ほど神様に信頼しなくなるように、手をつくしていたと思いますか？時々ダビデは、神様をとても愛していたのにもかかわらず、信頼するのを忘れることがありました。

ダビデはヨナタンと別れた後、シロの幕屋が移された先のノブの地へ行きました。そこの祭司は、ダビデが今でもサウルの特別な助け手であると思っていました。ダビデはそこへ着くと、祭司に、自分がサウルから逃げている身であることを言わずに、サウルの秘密の使いで来たと告げたのでした。

祭司から食べ物をもらったとき、ダビデはそこにサウルの召使いのドエグもいることに気づきました。その後ドエグはサウルに、ダビデを見かけたことを報告します。サウルは、祭司がダビデの味方についたと思いこみ、ドエグに祭司とその家族全員を殺すように命令したのです。逃げたひとりの息子をのぞいて、祭司の一族全員が命を失いました。ダビデはこれを聞いて、悲しみと後悔におそわれました。彼が神様に信頼して本当のことを話してさえいれば、こんなことにはならなかったのです！

ダビデはその後どこへ行きましたか？そしてこの時は、だれといっしょにいましたか？サムエル記上 22:1-2。

当然のことながら、ダビデは自分の家族の心配をしていました。家族の者が、サウルによって危害を受けてほしくはなかったからです。しばらくの間、家族をどこに住まわせようと決めましたか？ 3-4節。

モアブの地は、ダビデのひいおばあさ

んであるルツの生まれ故郷です。しばらくの間、ダビデと部下の者たちはそこにとどまりました。しかし神様が預言者を送り、ダビデにユダの地へ帰るように告げると、ダビデはそれにしたがいました。5節。

考えてみよう：サウルに追われる生活が終わる日がくるのかどうかダビデがうたがい始めたのはなぜか、あなたにはわかりますか？次の王様としてダビデに油を注いだことを、神様はお忘れになったのでしょうか？

金曜日

サウルはイスラエルの人たちに、ダビデを敵だと思い込ませようとしましたが、人々はそれが真実でないと知っていました。しかし、ダビデと仲間たちがどこに隠れているかをひそかに見張る役を進んでする者は、いつも必ずいました。森の隠れ家で、ヨナタンがダビデと仲間たちを見つけたとき、ダビデはどんなにうれしかったことでしょう！ふたたび話をすることができ、ヨナタンはダビデに、神様を信頼しつづけるよう励ましました。ヨナタンは家へ帰りましたが、ダビデはサウルに見つからないようそのまま隠れていました。サムエル記上 23:16-18。

ある時、サウルはダビデを捕らえようと山に登り、道のそばにある洞窟を見つけました。彼は兵士たちを置いて、たったひとりでその洞窟へと入って行きました。まさにその洞窟のずっと奥の暗い所に、ダビデと仲間の男たちが隠れていることを、サウルは知りませんでした！

サウルを見たダビデの兵士たちは、とても興奮しました！ダビデがサウルを殺す絶好の機会です。しかし、本当にそうなりましたか？サムエル記上 24:4-7。

サウルが洞窟を出た後、ある程度離れたところでダビデは何をしましたか？8-9節，16-18節。

サウルの約束を信じられたら、とダビデはどんなに願ったことでしょう！けれども彼は、サウルがすぐ心変わりするのを知っていました。それでダビデと仲間たちは、隠れて逃げ回る生活をつづけなければなりませんでした。

サムエルが死んだという知らせを聞いたダビデは、悲しみにくれました。彼は、父親のようにかわいがってくれたサムエ

ルを愛していました。しかし、あえて葬式へ行くことはしませんでした。サムエルがもうこの世にはいないことを知ったダビデは、これまでになかったほどの孤独を感じていました。

***考えてみよう：**サウルを簡単に殺すことのできたチャンスは、いちどだけではありませんでした。ダビデがそうしなかったことを、あなたはうれしく思いますか？サウルは自分が間違っていたと認めましたが、本当に悪かったと感じていたのでしょうか？あなたはどう思いますか？*

もっと学ぼう！

★サムエル記上 18:9-16;19:1-21:9; 22:1-23; 24:1-25:1

★人類のあけぼの 64章-65章（p. 344 まで）

風船

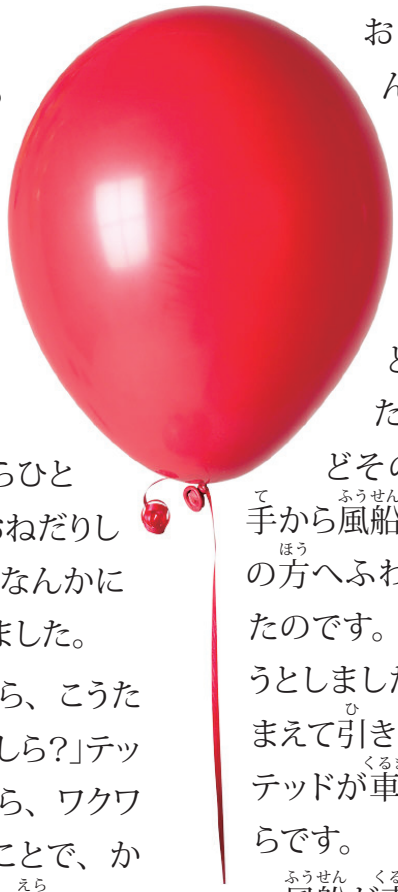
エイミー・シェラード

テッドは、お母さんと買い物に出かけるのが大好きでした。彼は、お母さんが食料品を選んでいるそばで、通路にそって買い物カートを押すのが好きでした。

ある日のこと、食料品ではありませんが、あるすてきな物を見つけました。それは大きな入れ物にいっぱいの、動物の顔が描かれた風船です。テッドはそれを指差しながら笑いました。

「ねぇお母さん、お願いだからひとつ買ってくれない?」テッドはおねだりしました。でも、お母さんが風船なんかに使うお金はないことを知っていました。

お母さんはちょっと考えてから、こうたずねました。「どれが欲しいのかしら?」テッドはいろんな風船をよく見ながら、ワクワクしています。そしてやっとのことで、かわいらしいうさぎの顔の風船を選びました。お母さんはテッドがそれを他の風船の間から取り出すのを手伝って、買い物カートの持ち手に風船を結びつけてくれました。「お金を払うまでは、これはまだ私たちの物ではないのよ。」お母さんはテッドに言ってきかせました。



「ぼうや、今すぐこれを手に持ちたいの?」と会計の女の人がたずねました。そしてテッドは礼儀正しくお礼を言いながら、夢中で風船をとりました。

「しっかり捕まえておくのよ。」お店を出るときに、お母さんはテッドに注意しました。「外はものすごく強い風が吹いているからね。」

テッドはとても注意して風船をつかんでいました。ところがどうしたことか、ふたりが車に乗ろうとしたちょうどその時、風が吹いてテッドの手から風船をすくい上げ、風船は道路の方へふわふわと飛んでいってしまったのです。テッドは風船を追いかけようとしましたが、お母さんが彼をつかまえて引きもどしました。そうしないと、テッドが車にひかれてしまいそうだからです。

風船が車に当たってはポンポンはずんでこえていき、ついには通りの向こう側へと飛んでいくのを見たとき、テッドは泣き出したい気持ちでした。

「お母さん、ねぇお願い、今なら絶対とってこれるから。」テッドは必死でお願いしました。それでお母さんが車を向うがわ

へとまわすと、風船がガソリンスタンドの給油ポンプのところを飛び回っているではありませんか。ところが、車がガソリンスタンドに来るまでに、風船はまたしても飛び立ってしまいました。風船は別の通りを横切って、せまい路地に入っていきました。

お母さんが車を路地へ入れると、テッドは車からぴょんと飛び出して風船を追いかけました。風船は、はずんで空中に舞っては地面に落ちるのを繰り返しています。それから、あとちょっとで風船をつかまえそうになったときに、風船はフェンスをこえて知らない人の庭へと入って行きました。テッドが走って門から庭へ入ると、小さな男の子が風船をつかまえようとしていました。男の子は満面に笑みを浮かべています。「見て、空からちょうどここにおりてきたんだよ!」男の子は慎重に風船をとりながらテッドに言いました。

テッドはもう少しで「それ、僕の風船なんだよ!」と言いそうでしたが、何かが彼を引き止めました。「僕、今までいちども風船を手にしたことがなかったけれど、この風船は天からここにおりてきてくれたんだ!」と、男の子はテッドに言いました。「ママに見せてくる。これかわいいでしょう?」男の子の目はキラキラと輝いています。

テッドの心の中は、ふしぎな気持ちでした。「たしかにかわいいね」と答えました。そして大きく息をついてから、こうつけ加えました。「この風船で、君がすてきな時間を過ごせるといいね。」テッドは車にもどりながら、振り返って男の子にほほ笑み、手をふりました。テッドが自分のしたことを話すと、お母さんはとても喜んでくれました。他に、だれが喜んでくれたと思いますか?

（終わり）